

## 第3章 調査結果の概要と分析

#### <調査結果の概要>

##### 1. 「男女の地位の平等感、男女の生き方、社会参加」について

○依然として“男性優位”と感じている人が多く、また、“男性は仕事優先、女性は家庭優先”といった性別役割分担意識が根強く残っているとと言えます。しかしながら、学校教育の場など分野によっては男女平等が進んでおり、また、特に若い世代においては性別役割分担意識が薄れてきていると推察されます。

○多くの方が、男女が共に社会に積極的に参加できるための育児・介護サービスなどの支援を受けながら、特に“政治の場”への女性の進出を望んでいます。

##### 2. 「家庭・結婚観」について

○依然として家事全般を女性が担っている割合が多くなっており、家庭生活においては女性への負担感が大きくなっています。逆に仕事については男性が多く時間を費やしており、家事や育児への参加が非常に少なくなっています。

○結婚や家庭などに対する考え方は性別や年代により大きなばらつきがみられ、価値観の多様化が進んでいるものと推察されます。本市においては、全国調査と比べると「夫は仕事、妻は家庭」の意識は比較的低くなっています。

##### 3. 「子どもの教育」について

○親の子どもの教育（進学）に関する考え方には【女の子】と【男の子】の場合で差があり、【女の子】の「大学」への進学は前回調査時よりも増加していますが、【男の子】の「大学」への進学と比べ割合は低く、大きな開きがあります。

##### 4. 「職業観」について

○男女ともに“出産後も職業を継続する”という考え方が一番多くなっており、全国調査と比べ、本市では「共働き」に対する希望が高いと言えます。

##### 5. 「男女の人権（セクシュアル・ハラスメント/配偶者等からの暴力）」について

○セクシュアル・ハラスメント（セクハラ）については、3割弱の女性において被害経験があると回答していますが、被害経験者の多くが被害を相談していないのが現状となっています。

○ドメスティック・バイオレンス（DV）については、3割弱の女性において被害経験があると回答していますが、被害経験者の約3割が被害を相談していないのが現状となっています。

##### 6. 「認知度、イメージ、市の施策に望むこと、その他」について

○各用語の認知度においては、多くの用語の認知度が5割を上回っているのに対し、市の「男女共同参画推進条例」や「男女共同参画推進プラン改訂版」に対する認知度は低くなっており、いずれの用語においても男性より女性の方が認知度が低くなっています。

○市の施策に望むことについては、子育てや介護など家庭生活や、就労関係など生活の中で現実直面している課題等の施策の充実を望む回答が多くなっています。

1. 「男女の地位の平等感、男女の生き方、社会参加」について

**男女の地位の平等感**

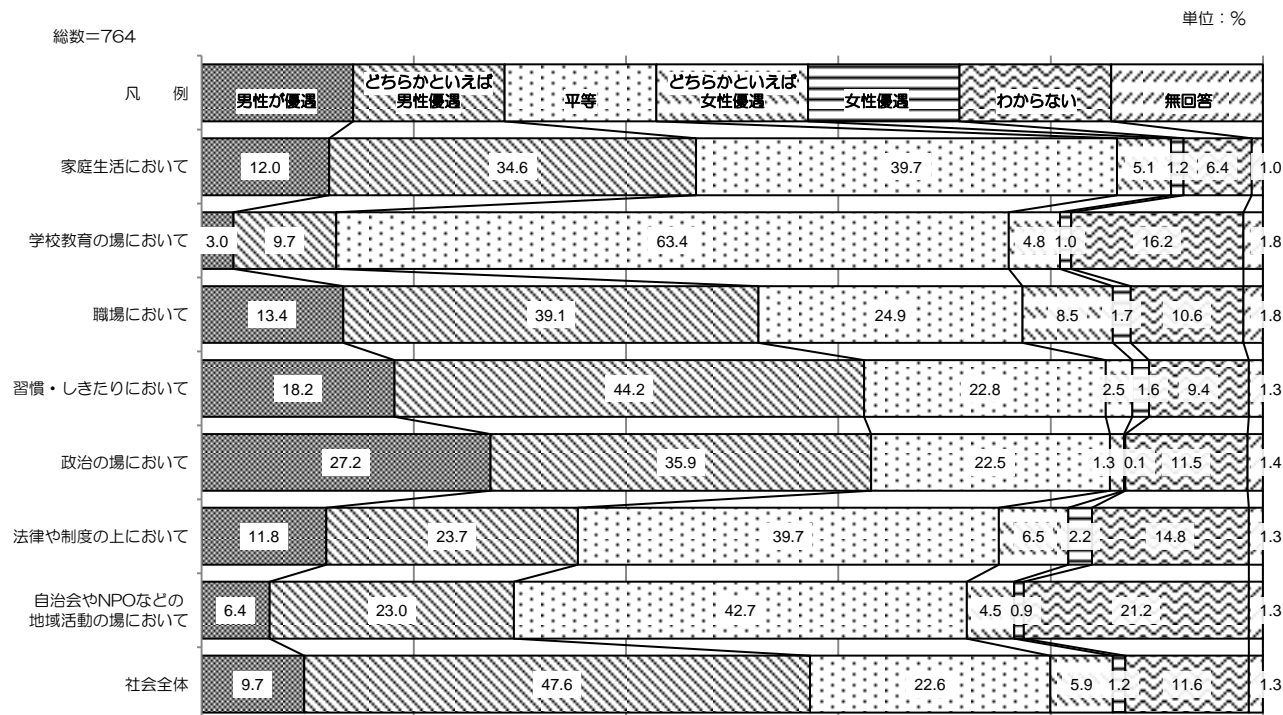
依然として“男性優位”と感じている人が多く、また、男女の意識に大きな隔たりがあると言えます。しかしながら、分野によっては男女平等が進んでいるところもあり、男女の地位の平等感が高まりつつあると推察されます。

問1 あなたは次にあげる分野及び社会全体で、男女の地位は平等になっていると思いますか。あなたの感じ方に近いものをそれぞれ1つ選んで、回答欄に番号をご記入ください。

<全体>

- 6つの選択肢のうち、「平等である」の割合が多い分野は、「学校教育の場（63.4%）」「地域活動の場（42.7%）」「家庭生活において（39.7%）」「法律や制度の上において（39.7%）」となっています。
- 男性の方が優遇されているという回答（「どちらかといえば男性が優遇されている」と「男性が優遇されている」の合計）が多い分野は、順に「政治の場（63.1%）」「習慣・しきたり（62.4%）」「社会全体（57.3%）」「職場（52.5%）」「家庭生活（46.6%）」となっており、5割弱から6割強に達しています。特に「政治の場」では、「男性が優遇されている」という回答が3割弱と1番多くなっています。
- 一方、女性の方が優遇されているという回答（「どちらかといえば女性が優遇されている」と「女性が優遇されている」の合計）は、「職場」以外の分野において1割未満と少ない数値になっています。

問1 男女の地位の平等感



### 第3章 調査結果の概要と分析

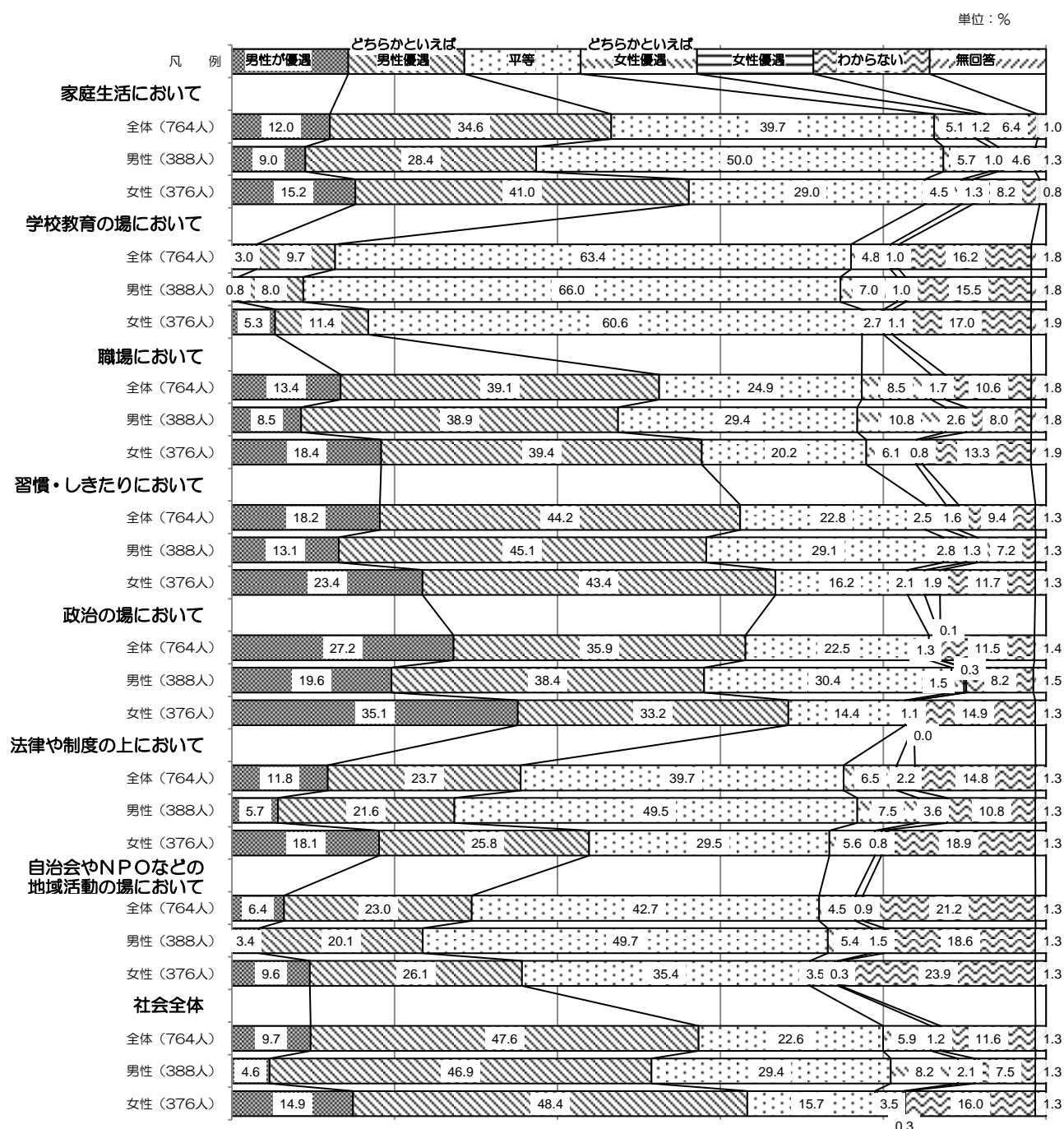
#### <性別>

○性別でみると、すべての分野において「男性が優遇されている」「どちらかといえば男性が優遇されている」の回答は、女性の方が男性を上回っています。特に「家庭生活」「法律や制度の上」「地域活動の場」では、その差が大きくなっています。

○一方、男性の約半数が「家庭生活」「法律や制度の上」「地域活動の場」では「平等である」と回答しており、それぞれの女性の回答数を大きく上回っています。

○女性優遇の回答は、特に職場などにおいて男性の方が女性を上回っているものが多くなっています。

#### 問1 男女の地位の平等感 <性別・分野別>

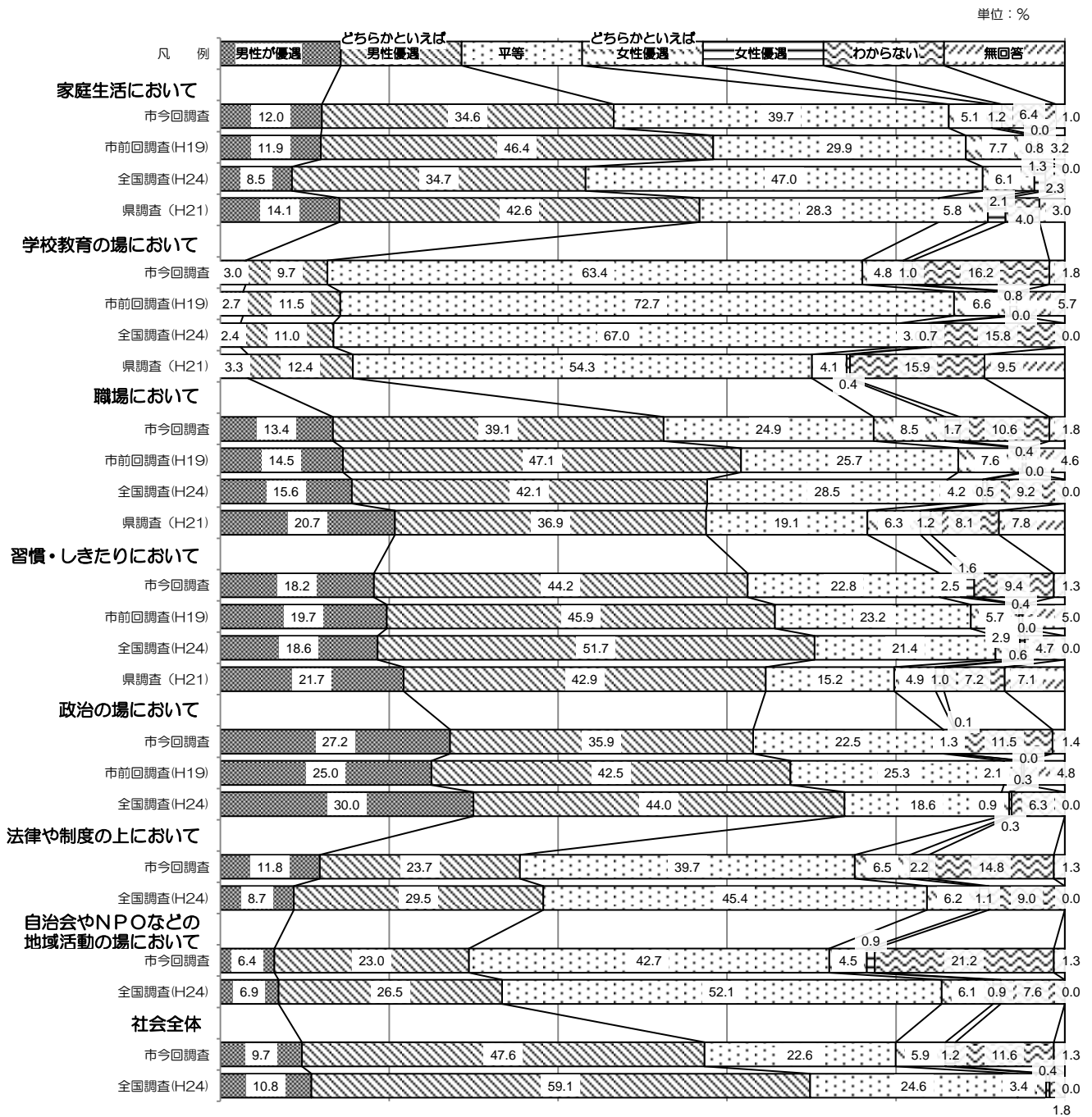


<前回調査、全国調査、県調査との比較>

○前回調査と比較すると、今回調査では「家庭生活」において「平等である」との回答の増加や、男性優遇（「どちらかといえば男性が優遇されている」と「男性が優遇されている」の合計）の回答数の減少がみられます。

○一方、全国調査や県調査と比較すると、ほぼ同様の傾向ではありますが、いずれの項目においても男性優遇の回答は減少しています。

問1 男女の地位の平等感 <前回調査・全国調査・県調査比較>



#### <考察>

○多くの項目において男性優遇の回答が多く、性別によって大きな差があることから、男女の意識に大きな隔たりがあることが調査結果から読み取れます。

○女性において、「政治の場」で「男性が優遇されている」との回答が特に多くなっています。これは「政治の場」においては、女性議員の数が非常に少なく、世界と比べて日本では特に女性の進出が進んでいない分野であり、女性の意識が反映された形になっているものと推察されます。

○前回調査との比較において、今回調査では「家庭生活」において「平等である」との回答の増加や、男性優遇（「どちらかといえば男性が優遇されている」と「男性が優遇されている」の合計）の回答数減少がみられることから、それぞれの場においては環境の変化や意識の変化が進んでおり、少しずつではありますが平等感が高まりつつあると推察されます。

**男女の生き方**

依然として女性は“家庭優先”、男性は“仕事優先”と考える人が多いと言えます。しかしながら、若い世代においては、これまでの偏った性別役割分担意識が薄れていると推察されます。

問2 女性及び男性の生き方として、あなたが望ましいと思うのは、どのような生き方でしょうか。  
女性の生き方、男性の生き方両方について、それぞれ1つ選んで、回答欄に番号をご記入ください。

**【女性の生き方について】****<全体>**

○6つの選択肢のうち、「家庭生活又は地域活動と仕事を同じように両立させる（37.4%）」が一番多く、次いで「仕事にも携わるが、家庭生活又は地域活動を優先させる（34.0%）」が多くなっています。

**<性別>**

○性別で見ると、男性においては、全体の傾向に比べ「仕事よりも、家庭生活又は地域活動に専念する」の割合がやや高くなっています。

○女性においては、全体の傾向に比べ「家庭生活又は地域活動にも携わるが、あくまで仕事を優先させる」が多くなっています。

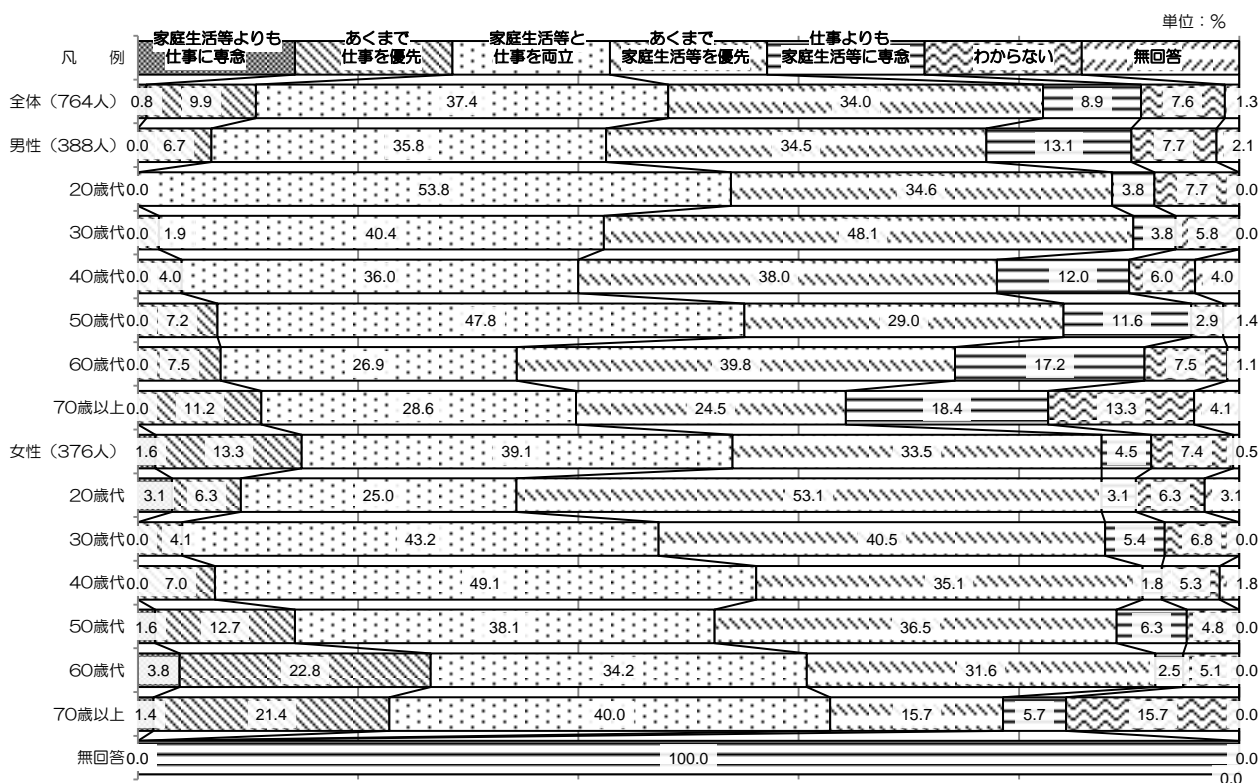
**<年代別>**

○男性においては、20歳代及び50歳代において「家庭生活又は地域活動と仕事を同じように両立させる」の回答が半数近くになっています。また、30歳代では「仕事にも携わるが、家庭生活又は地域活動を優先させる」が半数近くになっています。

○女性においては、20歳代で「仕事にも携わるが、家庭生活又は地域活動を優先させる」の回答が半数を超えるなど、若い世代を中心に“家庭生活等を優先”との考えが多くなっています。また、40歳代で「家庭生活又は地域活動と仕事を同じように両立させる」が半数近くになっています。

### 第3章 調査結果の概要と分析

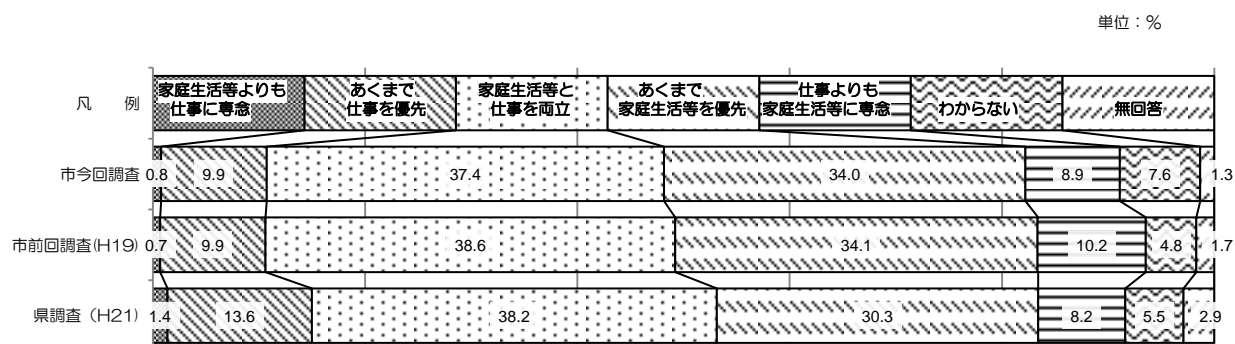
#### 問2 【女性の生き方について】



#### <前回調査、県調査との比較>

○前回調査や県調査と比較して、ほぼ同様の傾向となっています。

#### 問2 【女性の生き方について】 <前回調査、県調査との比較>



#### 【男性の生き方について】

##### <全体>

○6つの選択肢のうち、「家庭生活又は地域活動にも携わるが、あくまで仕事を優先させる (46.9%)」が一番多く、次いで「家庭生活又は地域活動と仕事を同じように両立させる (34.2%)」が多くなっています。

##### <性別>

○性別でも、男女ともに「家庭生活又は地域活動にも携わるが、あくまで仕事を優先させる」との回答が多くなっています。

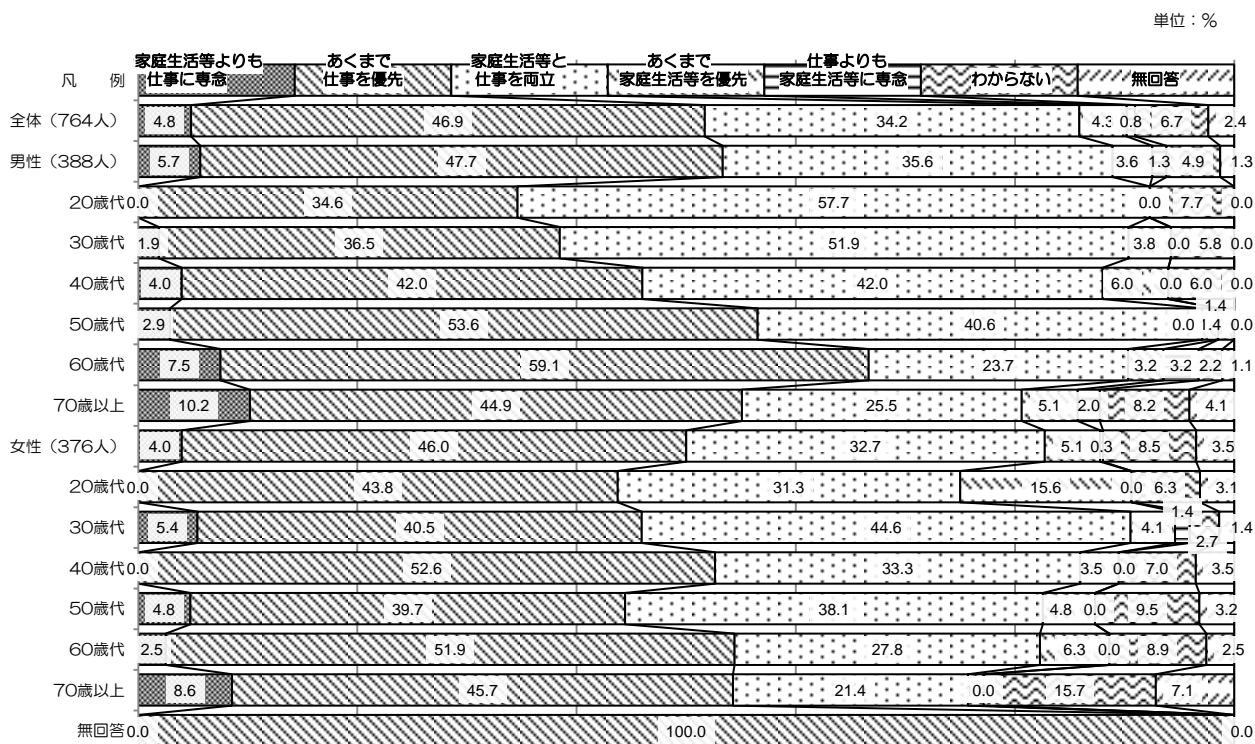


<年代別>

○男性において、年代が上がるにつれて「家庭生活又は地域活動にも携わるが、あくまで仕事を優先させる」との回答が多くなっています。逆に、若い年代ほど「家庭生活又は地域活動と仕事を同じように両立させる」との回答が多くなっています。

○女性においても、「家庭生活又は地域活動にも携わるが、あくまで仕事を優先させる」との回答が多くなっていますが、20歳代で「仕事にも携わるが、家庭生活又は地域活動を優先させる」との回答が他の年代よりも多くなっています。

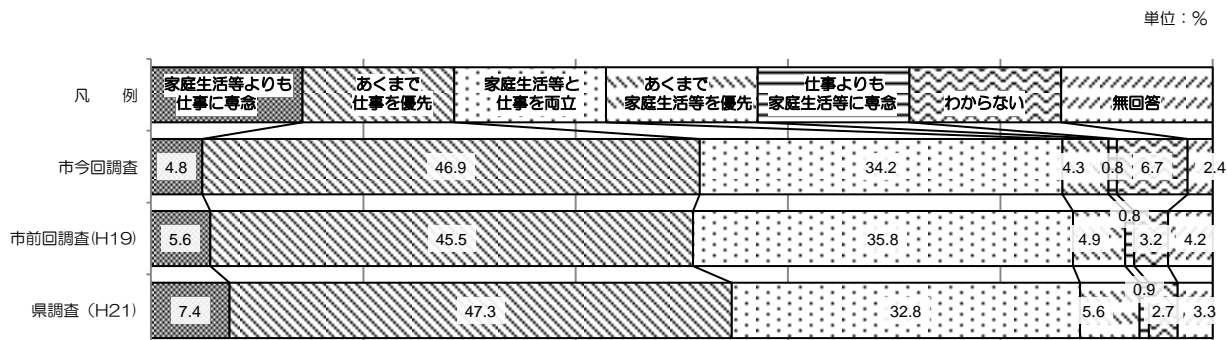
問2 【男性の生き方について】



<前回調査、県調査との比較>

○前回調査や県調査と比較して、ほぼ同様の傾向となっています。

問2 【男性の生き方について】 <前回調査、県調査との比較>



#### <考察>

○調査結果から女性と男性のそれぞれの生き方について、女性は“家庭優先”、男性は“仕事優先”といった考えが多くみられ、偏った性別役割分担意識があることが読み取れます。

○しかしながら、若い年代の男性ほど「家庭生活又は地域活動と仕事を同じように両立させる」との回答が多くなっていることから、これまでの偏った分担意識が薄れてきていることが推察されます。

○このことから今後、女性への家庭負担、男性への仕事負担を互いに軽減できるような方策（たとえば女性には負担軽減に向けたサービスの充実、男性には固定的性別役割分担意識の改革に向けた取り組みなど）が必要と考えられます。

**役職で女性がもっと増えた方がよいと思うもの**

多くの方が「政治の場」への女性の進出を望んでいます。政策などへの女性視点による意見の反映を希望しているということが推察されます。

問3 あなたが、次にあげるような政策、方針決定に関わる役職において、今後女性がもっと増えたほうがよいと思うものをすべて選んで、回答欄に番号をご記入ください。

**<全体>**

○「国会や都府県議会、市（区）町村議会議員」の増加を望む回答が 50.7%と半数を超えています。次いで順に「企業の管理職（45.2%）」、「裁判官、検察官、弁護士（43.6%）」、「都道府県、市（区）町村の首長（43.1%）」、「国家公務員、地方公務員の管理職（42.9%）」「起業家、経営者（42.0%）」がそれぞれ4割を超えています。

**<性別>**

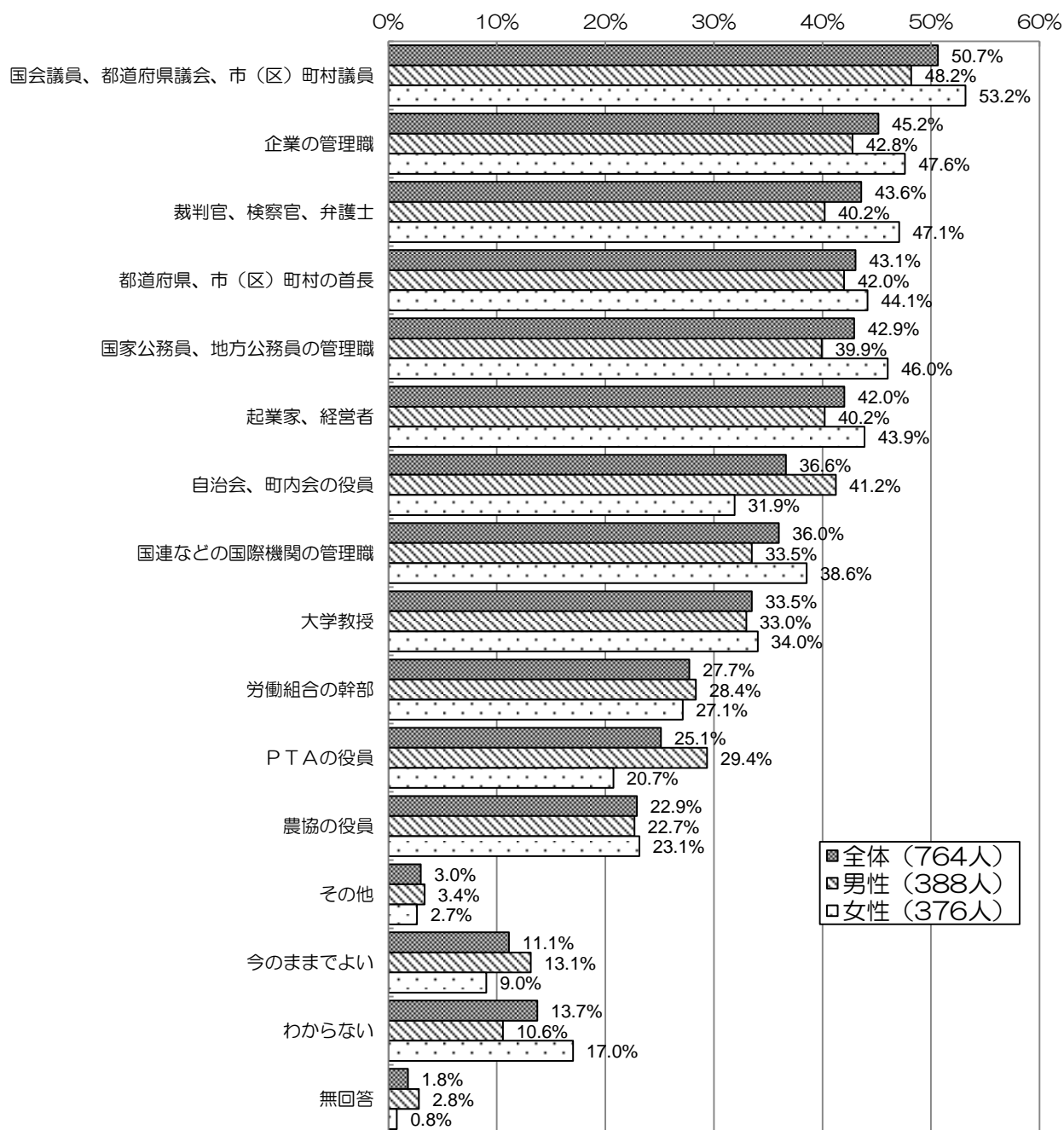
○男性においては、「国会や都府県議会、市（区）町村議会議員」の増加を希望する回答が 48.2%と一番多く、次いで順に「企業の管理職（42.8%）」「都道府県、市（区）町村の首長（42.0%）」「自治会、町内会の役員（41.2%）」「裁判官、検察官、弁護士（40.2%）」「起業家、経営者（40.2%）」「国家公務員、地方公務員の管理職（39.9%）」となっています。

○女性においては、「国会や都府県議会、市（区）町村議会議員」の増加を希望する回答が 53.2%と半数を超えており、次いで順に「企業の管理職（47.6%）」「裁判官、検察官、弁護士（47.1%）」「国家公務員、地方公務員の管理職（46.0%）」「都道府県、市（区）町村の首長（44.1%）」「起業家、経営者（43.9%）」となっています。

○男女の回答を比べると、ほとんどの選択肢で女性がより多く回答していますが、「自治会、町内会の役員」や「PTAの役員」などでは男性の回答数が女性の回答数を上回っています。

### 第3章 調査結果の概要と分析

#### 問3 役職で女性がもっと増えた方がよいと思うもの <性別>

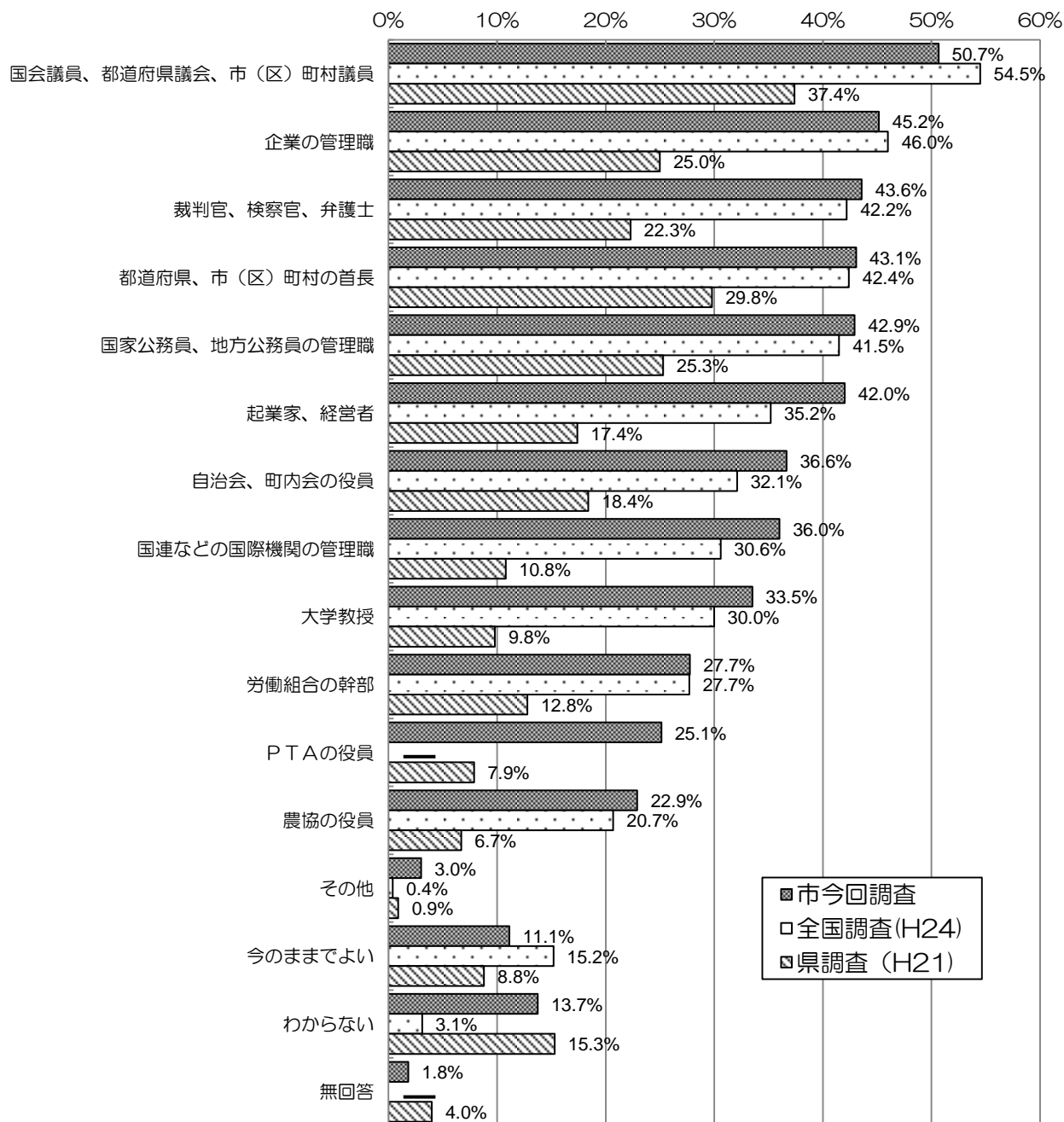


(その他の回答)  
 ・性別に関係なく、適材適所で行うべき(6名) ・医者 ・運転手 ・清掃作業員  
 ・男性の仕事と思われるもの ・女性に支配的な立場はふさわしくない  
 ・男性と共に語れないのではないかな

#### <全国調査、県調査との比較>

○全国調査と比較してほぼ同様の傾向となっています。県調査と比較すると各設問において3割以上数値が高いことがわかります。

問3 役職で女性がもっと増えた方がよいと思うもの <全国調査、県調査との比較>



<考察>

○調査結果から、多くの方が「政治の場」への女性の進出を望んでおり、女性視点による政治の場からの変化を期待していることが推察されます。

○男性の回答割合が女性の回答割合を上回っている分野（「自治会、町内会の役員」や「PTAの役員」）ではいずれも女性の進出している割合が低い分野であることから、男性は女性にもっと増えてほしい（役割を担ってほしい）と考えていることが推察されます。

**男女が社会参加へ必要だと思うもの**

家庭や職場などの生活に密着した部分において、男女両方が利用しやすい制度の普及や育児・介護に係る施設面の充実、労働条件の向上などが望まれています。

問4 今後、女性と男性がともに仕事、家庭、育児、介護、地域活動等に積極的に参加していくためには、どのようなことが必要だと思いますか。あてはまるものを3つまで選んで、回答欄に番号をご記入ください。

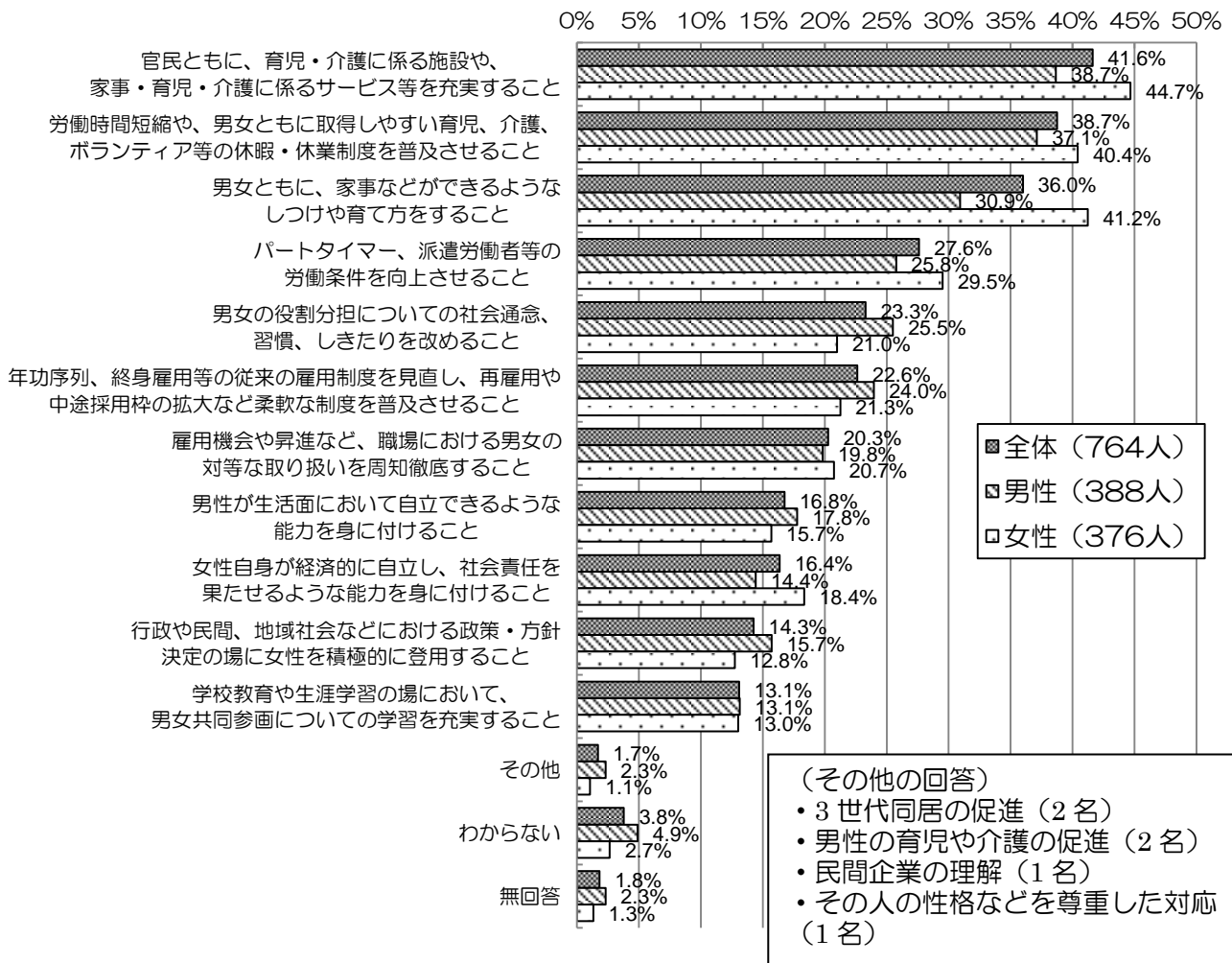
<全体>

○「官民ともに、育児・介護に係る施設や、家事・育児・介護に係るサービス等を充実すること」が41.6%と一番多くなっています。次いで順に「労働時間短縮や、男女ともに取得しやすい育児、介護、ボランティア等の休暇・休業制度を普及させること（38.7%）」「男女ともに、家事などができるようなしつけや育て方をすること（36.0%）」がそれぞれ3割を超えています。

<性別>

○男女の回答数を比べると、「男女ともに、家事などができるようなしつけや育て方をすること」において女性の回答数が多く、10%以上の開きがあります。

問4 男女が社会参加へ必要だと思うもの <性別>

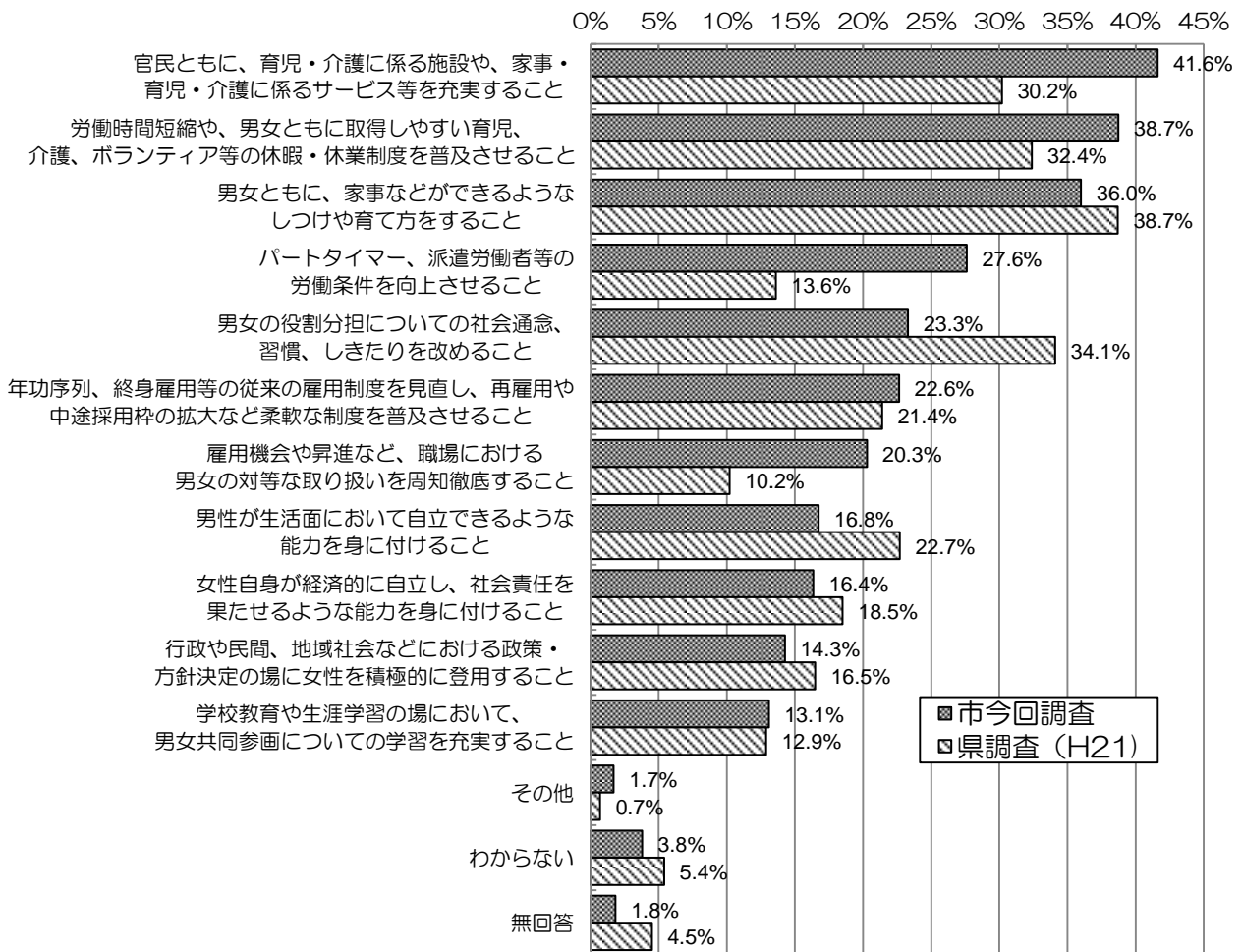


<県調査との比較>

○県調査と比較すると、「官民ともに、育児・介護に係る施設や、家事・育児・介護に係るサービス等を充実すること」「労働時間短縮や、男女ともに取得しやすい育児、介護、ボランティア等の休暇・休業制度を普及させること」「パートタイマー、派遣労働者等の労働条件を向上させること」についての回答が大きく上回っています。

○また、「男女の役割についての社会通念、習慣、しきたりを改めること」については、10.8%下回っています。

問4 男女が社会参加へ必要だと思うもの <県調査との比較>



<考察>

○調査結果から、育児・介護に係る施設やサービスの充実、休暇・休業制度の普及など、家庭や職場などの生活に密着した部分での改善を望んでいることが読み取れます。

○「男女ともに、家事などができるようなしつけや育て方をすること」で女性の方が男性より10%以上高い開きがあり、これは、家事負担が集中している現状に女性自身が不平等感を持っていることが原因ではないかと推察されます。

2. 「家庭・結婚観」について

**家庭生活での役割分担**

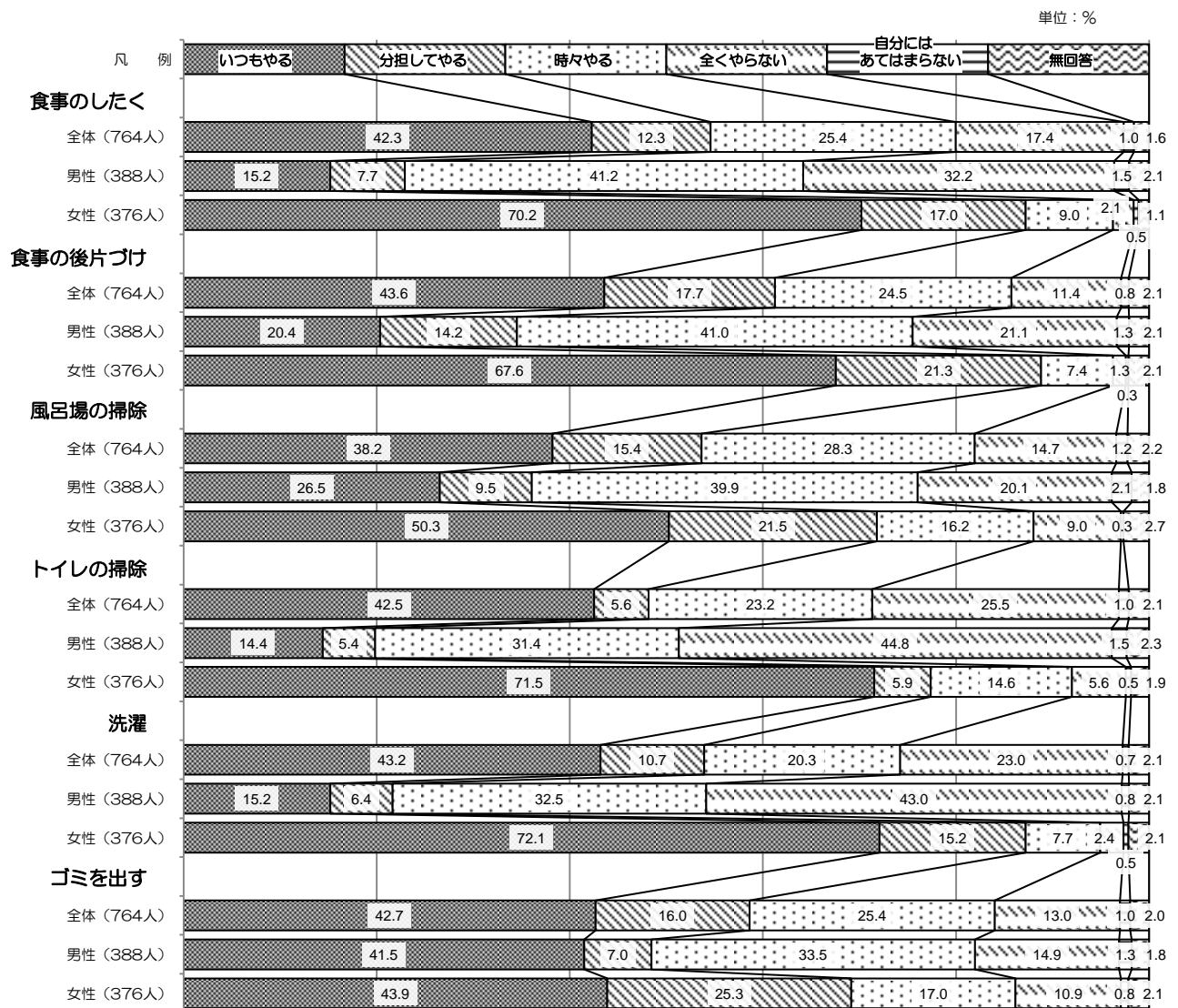
依然として家事全般を女性が担っているのが現状となっています。しかしながら、一部では男女の意識の変化も見受けられます。

問5 あなたは家庭で、次のことについてどの程度行っていますか。あてはまるものをそれぞれ1つ選んで、回答欄に番号をご記入ください。

<全体>

○12の質問項目のうち、「ごみを出す」や「地域行事参加や近所とのつきあい」「親戚とのつきあい」の項目以外において、女性が担っている割合が圧倒的に多く、女性の「いつもやる」との回答が男性の回答を大きく上回っています。

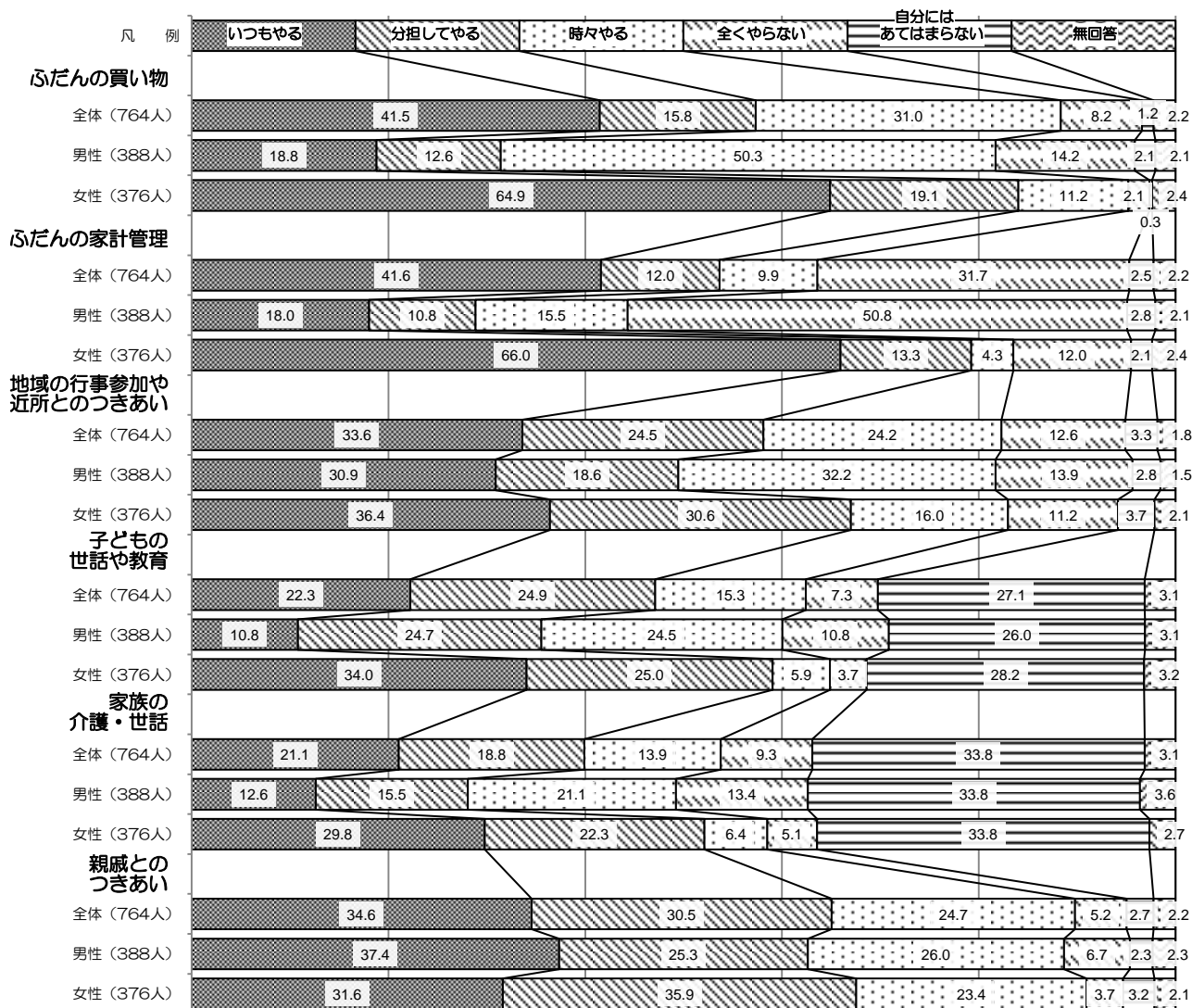
問5 家庭生活での役割分担 <性別>





問5 家庭生活での役割分担 <性別> (続き)

単位：%



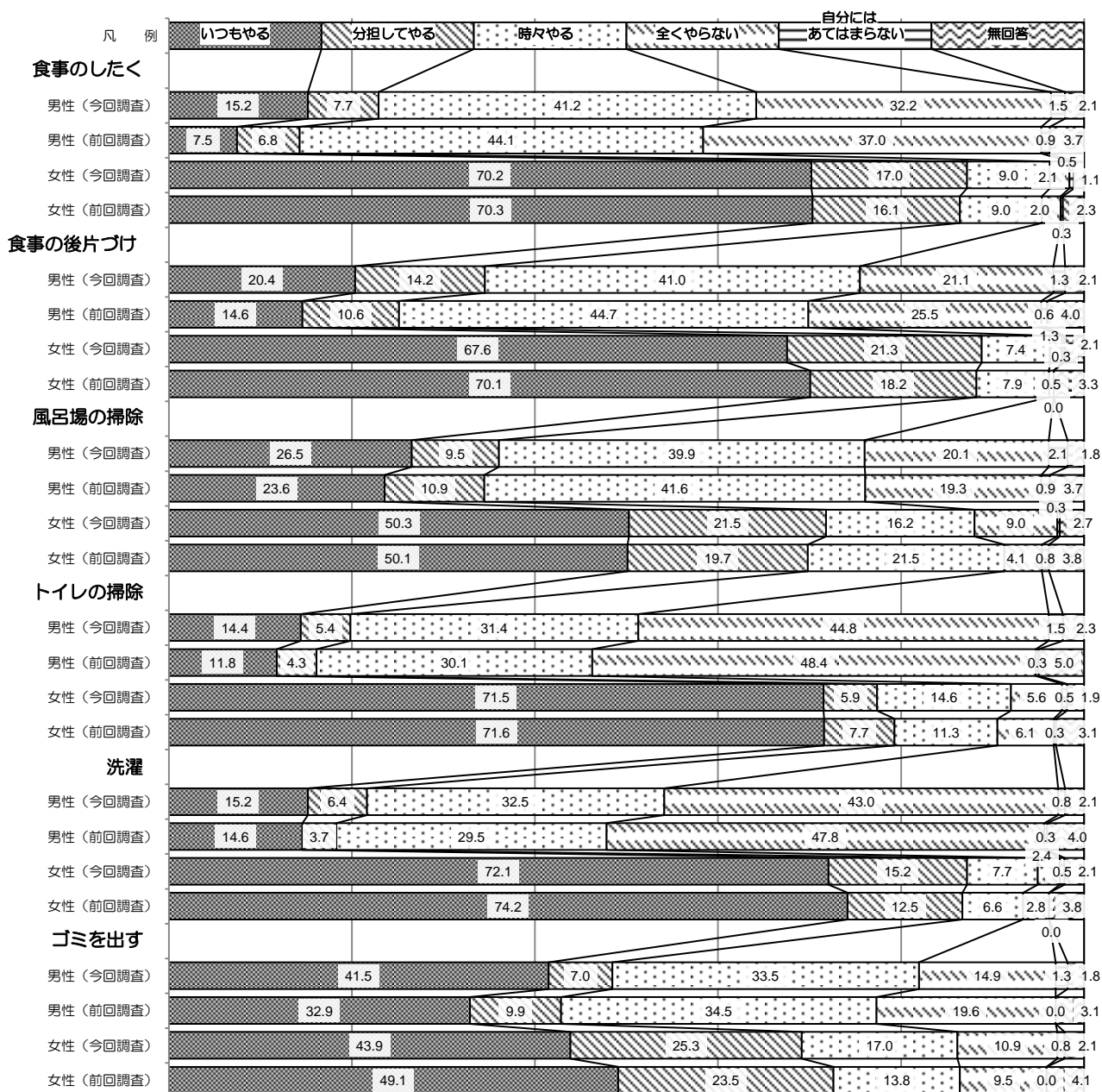
<前回調査との比較>

○前回調査と比較すると、男女ともに大きな変動は見られませんが、「親戚とのつきあい」以外の項目において、「いつもやる」の男性の回答が微増しています。また、「地域行事参加や近所とのつきあい」において、「いつもやる」の女性の回答が他の項目に比べ比較的大きく増加しています。

### 第3章 調査結果の概要と分析

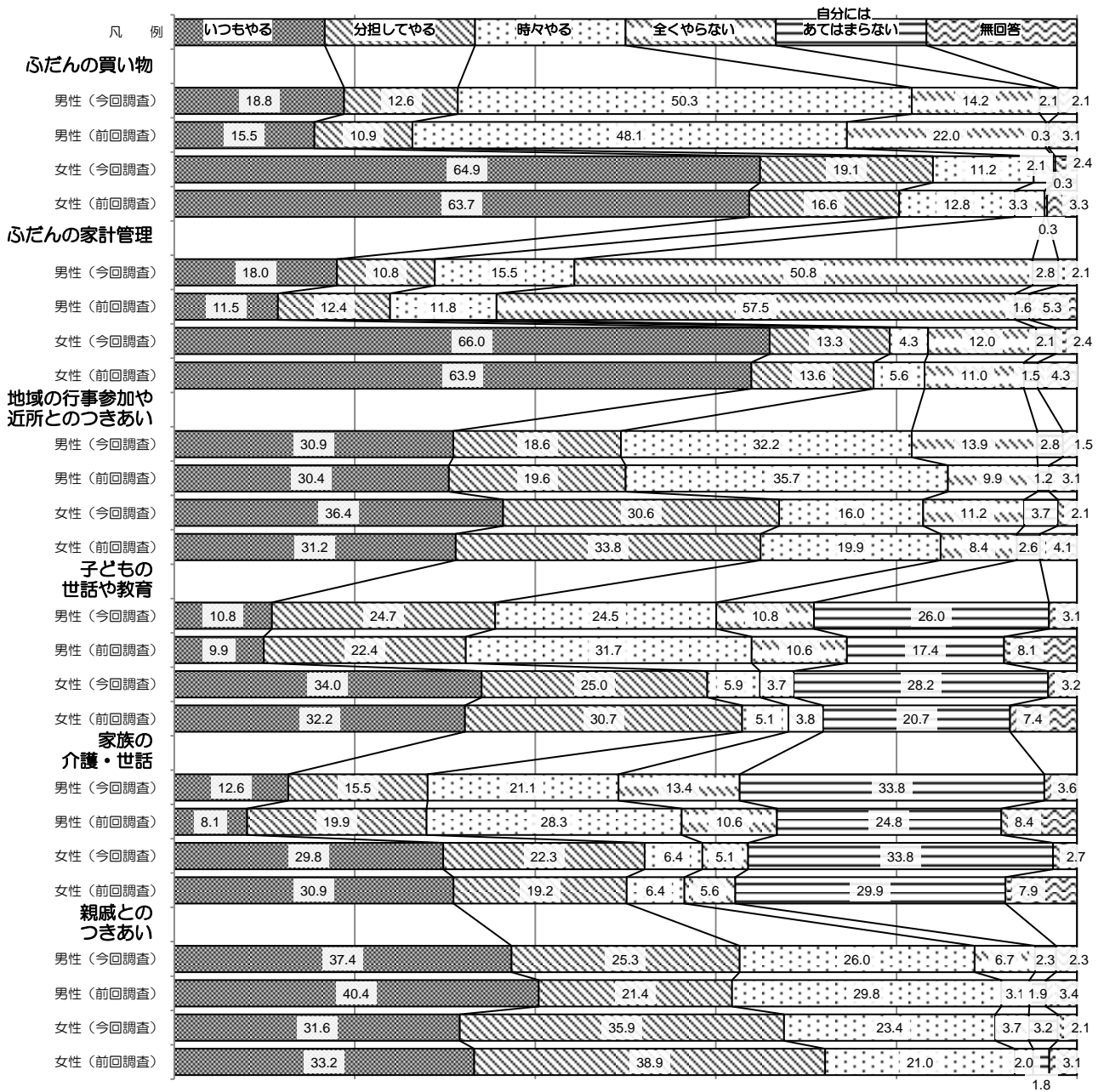
#### 問5 家庭生活での役割分担 <前回調査との比較>

単位：%



問5 家庭生活での役割分担 <前回調査との比較> (続き)

単位：%



<考察>

○調査結果から、「食事のしたく」などを中心に、家事全般を女性が担っており、女性に対する家事負担が重くなっていることが推察されます。

○しかしながら、前回調査と比較して、多くの項目において、男性の「いつもやる」との回答が微増しており、なんらかの理由により男性の家事参加が進んでいることが推察されます。また、「地域行事参加や近所とのつきあい」において、「いつもやる」の女性の回答が他の項目に比べ比較的大きく増加しており、女性の地域等への参加も進んでいることが推察されます。

**家庭生活で感じること**

家庭は、男性にとって「のびのびほっとできる場所」、女性にとっては「のびのびできるが、忙しく疲れる場所」となっており、男女で感じ方に差があります。これは家事負担の差によるものと推察されます。

問6 あなたは、現在の家庭生活について、どのように感じていますか。あてはまるものを2つまで選んで、回答欄に番号をご記入ください。

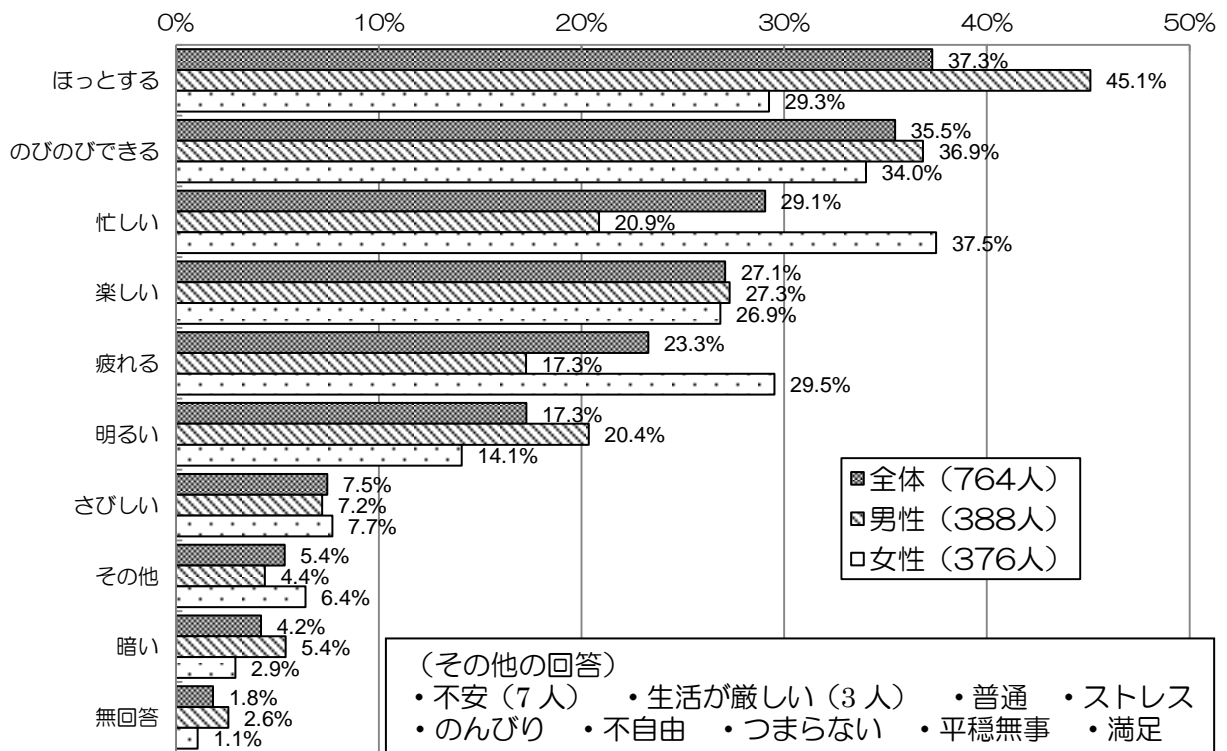
<全体>

○9つの選択肢のうち、「ほっとする」が37.3%で一番多くなっています。次いで順に「のびのびできる(35.5%)」「忙しい(29.1%)」「楽しい(27.1%)」「疲れる(23.3%)」が多くなっています。

<性別>

○男性においては、「ほっとする(45.1%)」が一番多く、次いで順に「のびのびできる(36.9%)」「楽しい(27.3%)」となっています。  
 ○女性においては、「忙しい(37.5%)」が一番多く、次いで順に「のびのびできる(34.0%)」「疲れる(29.5%)」「ほっとする(29.3%)」「楽しい(26.9%)」となっています。

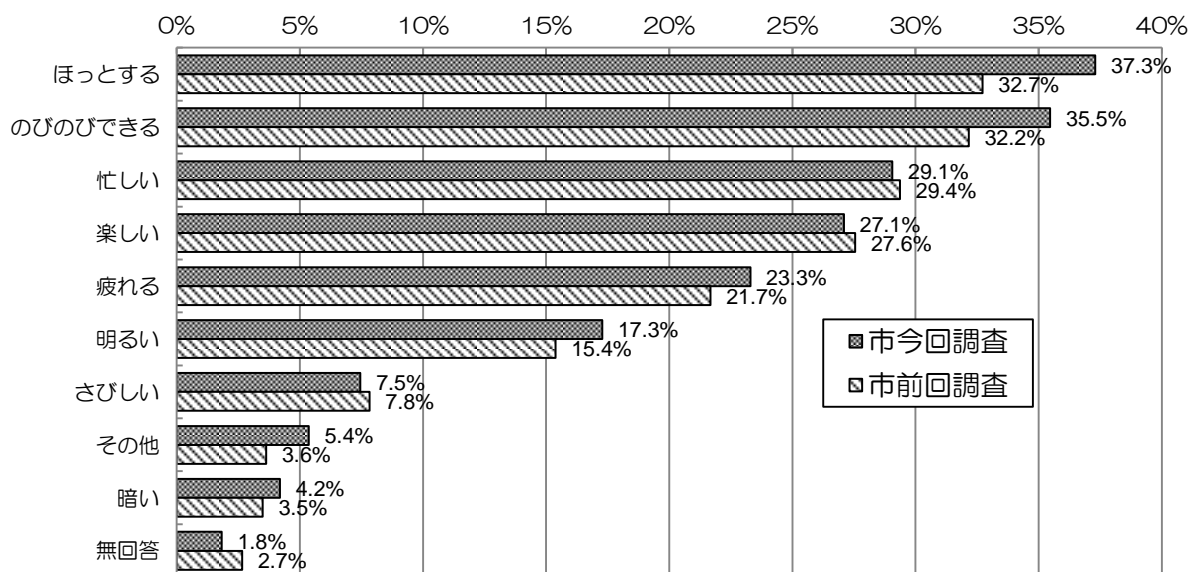
問6 家庭生活で感じること <性別>



<前回調査との比較>

○前回調査と比較すると、ほぼ同様の傾向となっています。なお、「ほっとする」が4.6%、「のびのびできる」が3.3%増加しています。

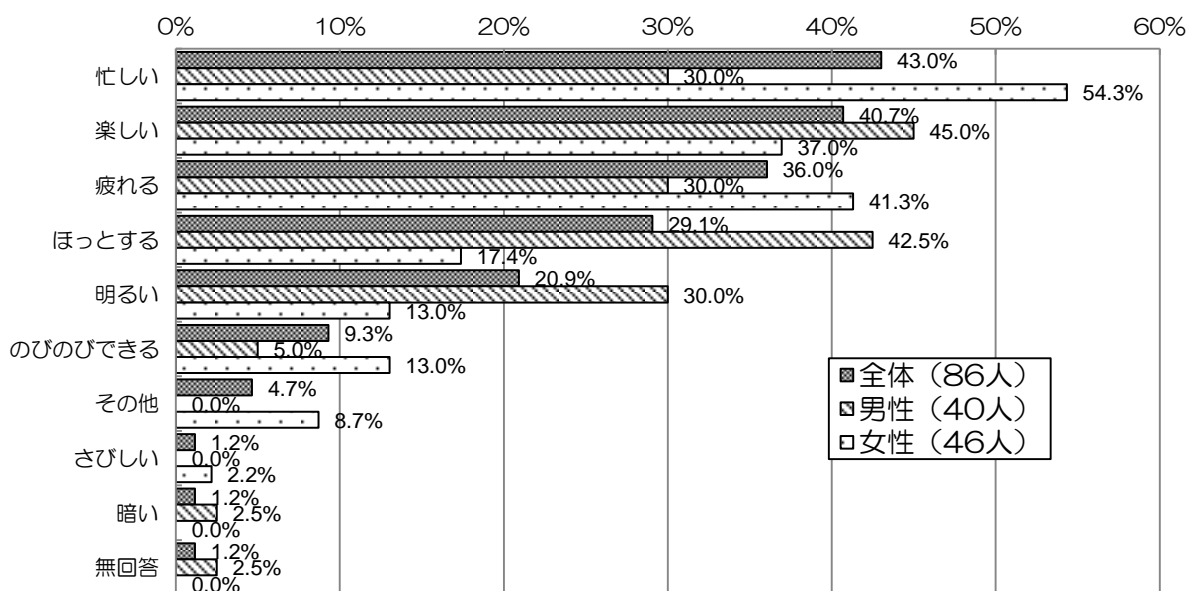
問6 家庭生活上で感じる事 <前回調査との比較>



<幼児がいる人のみの場合>

○全体の傾向と違い、「忙しい(43.0%)」「楽しい(40.7%)」「疲れる(36.0%)」「ほっとする(29.1%)」と続いており、「楽しい」が多くなり、「のびのびできる」は低くなっています。このことから育児や家事の負担は大きいと感じているものの、「楽しい」との気持ちも多い様子がうかがえます。

問6 家庭生活上で感じる事 <性別・幼児がいる人のみ>



<考察>

○調査結果から、家庭生活は性別によって感じ方に差があることが読み取れます。特に女性においては「忙しく、疲れる場所」との回答が多く、問5の結果からも、これは家事負担の差によるものと推察されます。なお、男性も仕事等の疲れなどから、家庭がホッとできる場所となっているのではないかと推察されます。

**仕事・家事・育児・介護等に費やす時間**

男性は「仕事」に費やす時間が大方を占め、家事や育児へ費やす時間が非常に短くなっています。一方女性は家事や育児に費やす時間が長くなっています。

問7 あなたは、次にあげる項目について、1日にどの程度の時間を費やしていますか。おおよその時間をご記入ください。(就業している人は、仕事をしている日で記載してください。)

<全体>

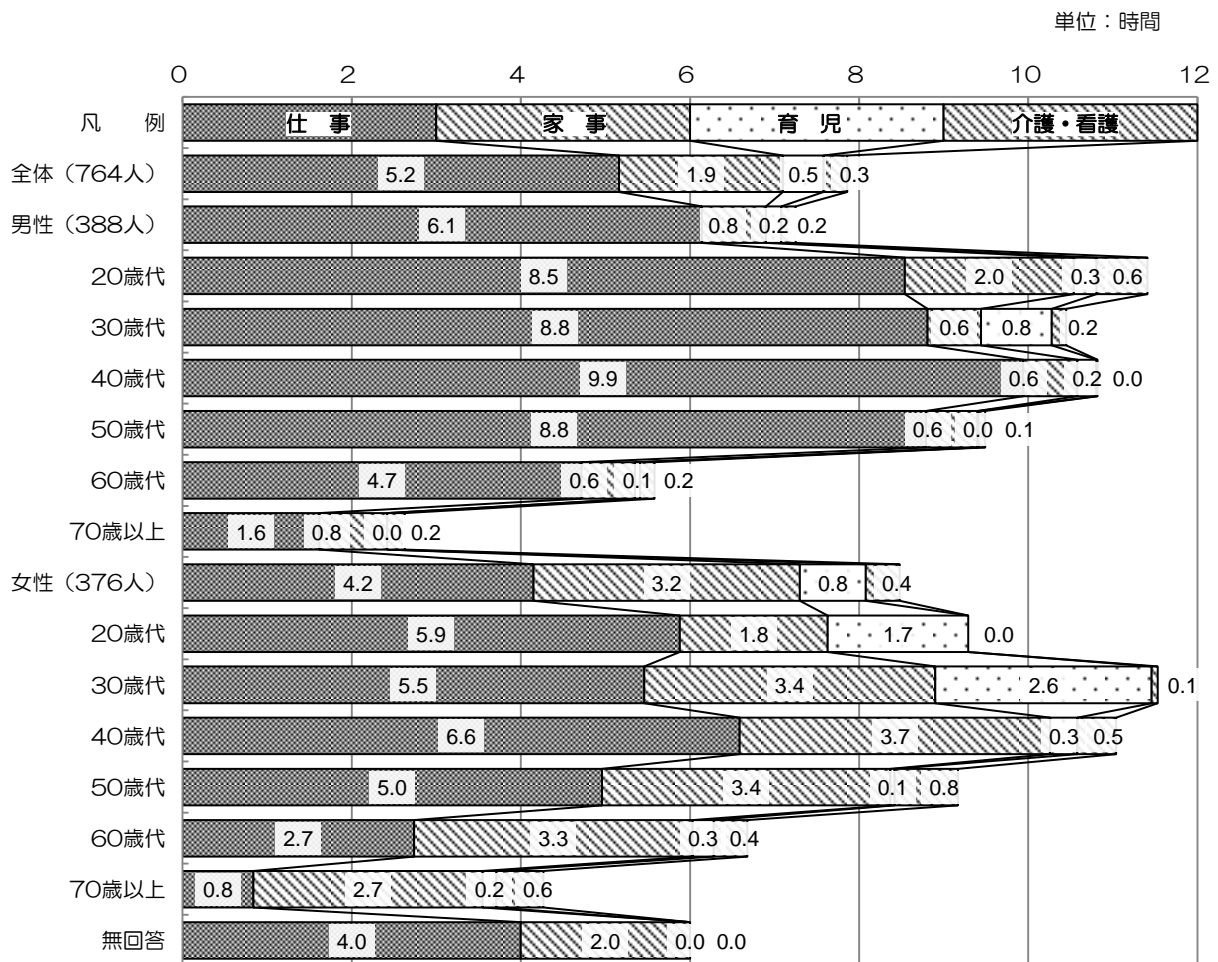
○「仕事」の時間は、女性よりも男性の方が2時間程度長く、「家事」は逆に女性の方が2時間20分長くなっています。

<性別・年代別>

○男性においては、20歳代から50歳代で「仕事」の時間が8時間を超えています。

○女性においては、30歳代から60歳代にかけて3時間強を「家事」に費やしています。また、20歳代から30歳代では2時間程度を「育児」に費やしています。

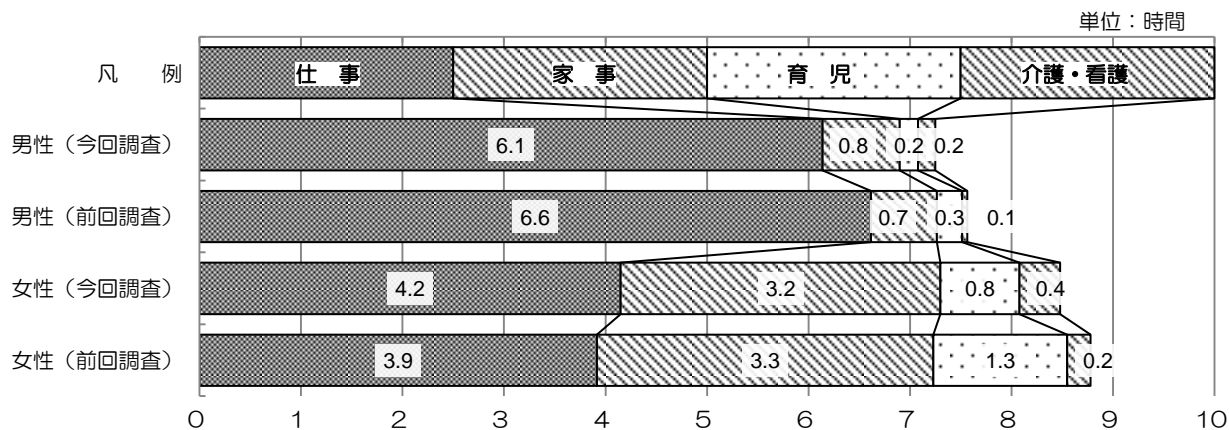
問7 仕事・家事・育児・介護等に費やす時間 <性別・年代別>



＜前回調査との比較＞

○前回調査と比較すると、「仕事」の時間が男性は若干減少し、女性は若干増加しています。また、「育児」の時間が女性で若干減少しています。

問7 仕事・家事・育児・介護等に費やす時間 ＜前回調査との比較＞



＜考察＞

○調査結果から、「男性は仕事」、「女性は家事」といった性別役割分担が浸透している現実が読み取れます。

○日本と諸外国とを比較して、日本では男性の家事や育児に費やす時間が短い理由に、男性の就業時間の長さが挙げられており、本調査からも裏付けられた形となっています。

○ワーク・ライフ・バランス（仕事と生活の調和）の推進による男性の仕事負担の軽減と女性の家事負担の軽減が必要と考えられます。

**結婚・家庭・離婚に関する考え方**

性別・年代により考え方に大きなばらつきがみられ、価値観の多様化が進んでいるものと推察されます。また、本市では「夫は仕事、妻は家庭」の意識は比較的低い結果となっています。

問8 結婚、家庭、離婚に関する考え方について、あなたのお考えに最も近いものをそれぞれ1つ選んで、回答欄に番号をご記入ください。

<全体>

○6つの質問項目のうち、賛成派（「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」の合計）が多いのは、「結婚は個人の自由であるから、結婚しなくてもどちらでもよい」「一般に、今の社会では離婚すると女性の方が不利である」となっており、それ以外は反対派（「どちらかといえばそう思わない」と「そうは思わない」の合計）が多くなっています。

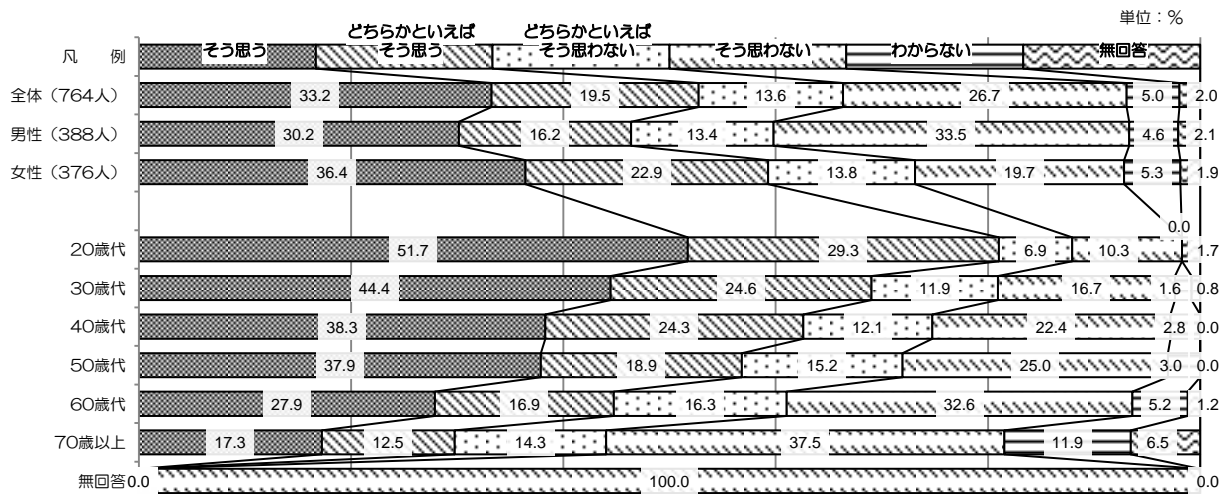
<性別>

○6つの質問項目のうち、男性においてはすべての質問項目で反対派が多くなっています。○女性においては、「結婚は個人の自由であるから、結婚しなくてもどちらでもよい」「女性は結婚したら、自分自身より、夫や子どもなど家族を中心に考えて生活した方がよい」「一般に、今の社会では離婚すると女性の方が不利である」で賛成派が多くなっています。

<年代別>

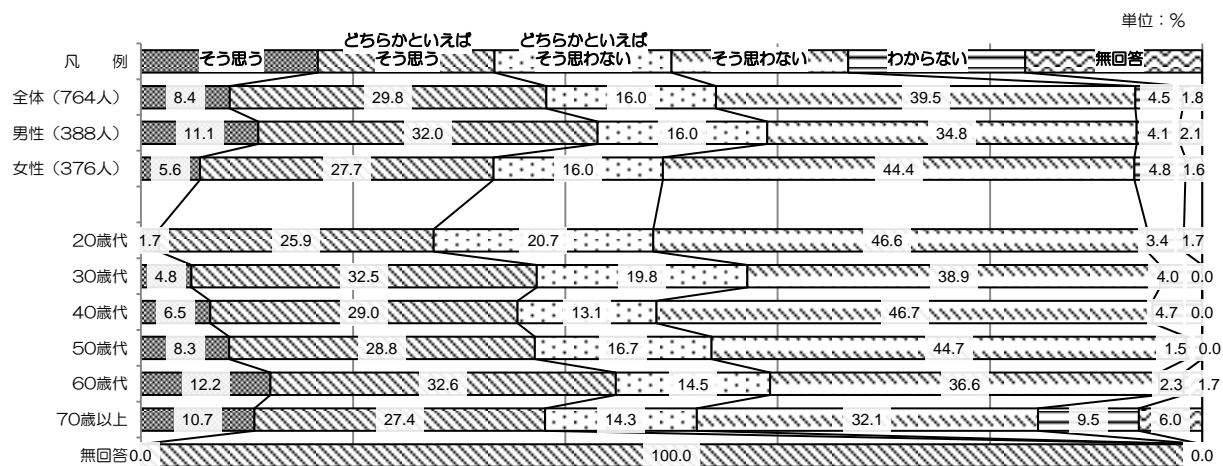
○6つの質問項目のうち、「結婚は個人の自由であるから、結婚しなくてもどちらでもよい」「女性は結婚したら、自分自身より、夫や子どもなど家族を中心に考えて生活した方がよい」「結婚しても必ずしも子どもをもつ必要はない」「結婚しても相手に満足できないときは離婚すればよい」で年代による意識の差が顕著にみられます。

問8-（1） 結婚・家庭・離婚に関する考え方 <結婚は個人の自由であるから、結婚しなくてもどちらでもよい>

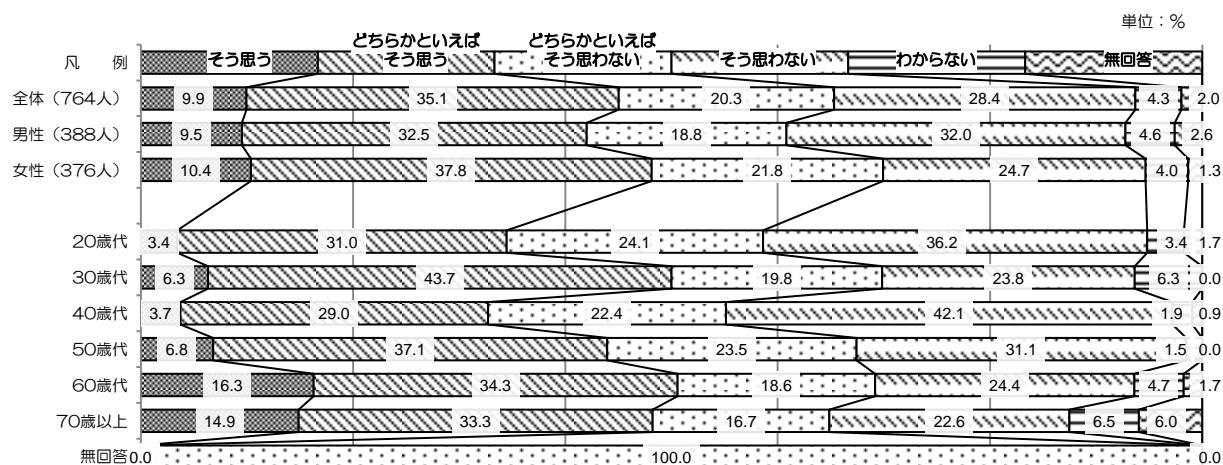




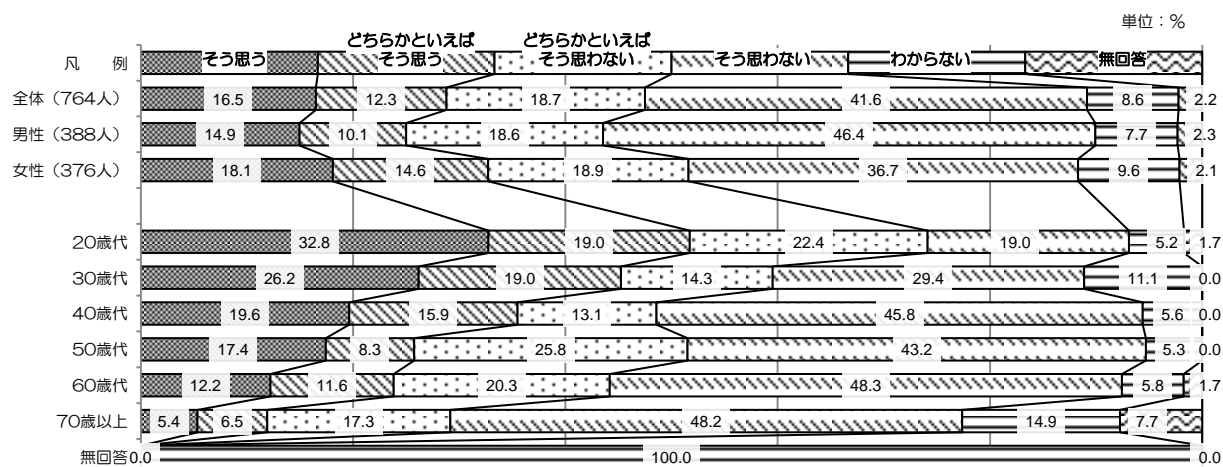
問8-(2) 結婚・家庭・離婚に関する考え方 <夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである>



問8-(3) 結婚・家庭・離婚に関する考え方 <女性は結婚したら、自分自身より、夫は子どもなど家族を中心に考えて生活した方がよい>

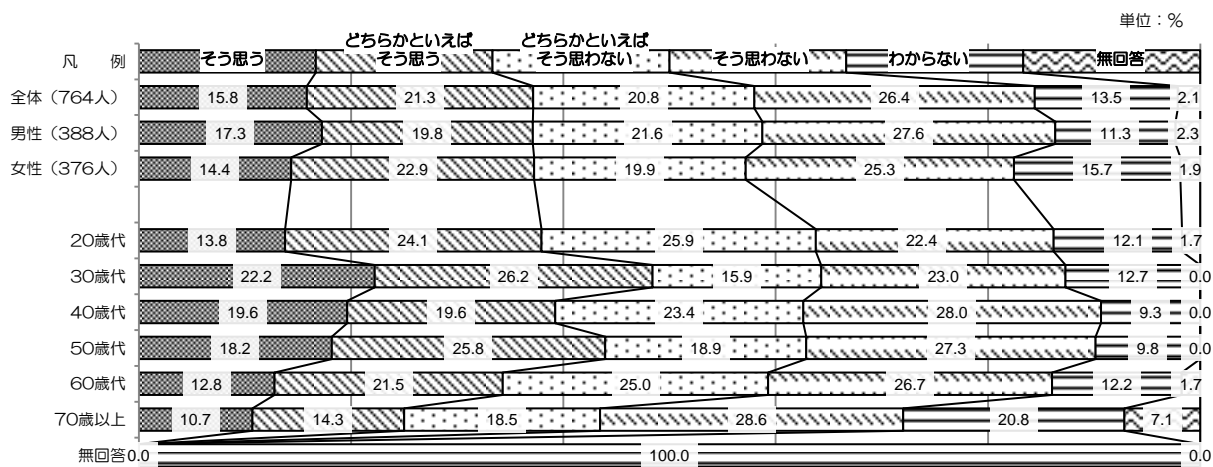


問8-(4) 結婚・家庭・離婚に関する考え方 <結婚しても必ずしも子どもをもつ必要はない>

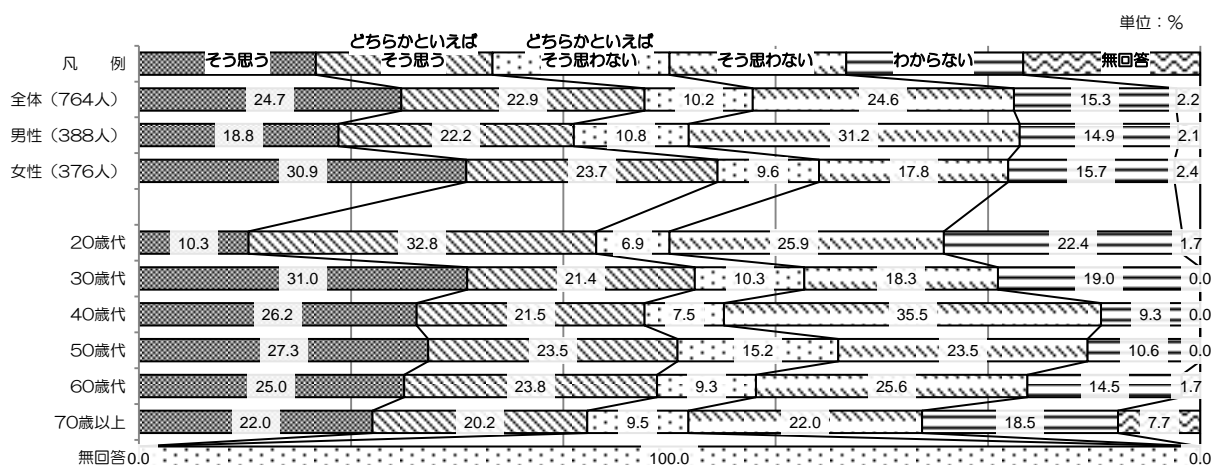


### 第3章 調査結果の概要と分析

問8-(5) 結婚・家庭・離婚に関する考え方 <結婚しても相手に満足できないときは離婚すればよい>



問8-(6) 結婚・家庭・離婚に関する考え方 <一般に、今の社会では離婚すると女性の方が不利である>



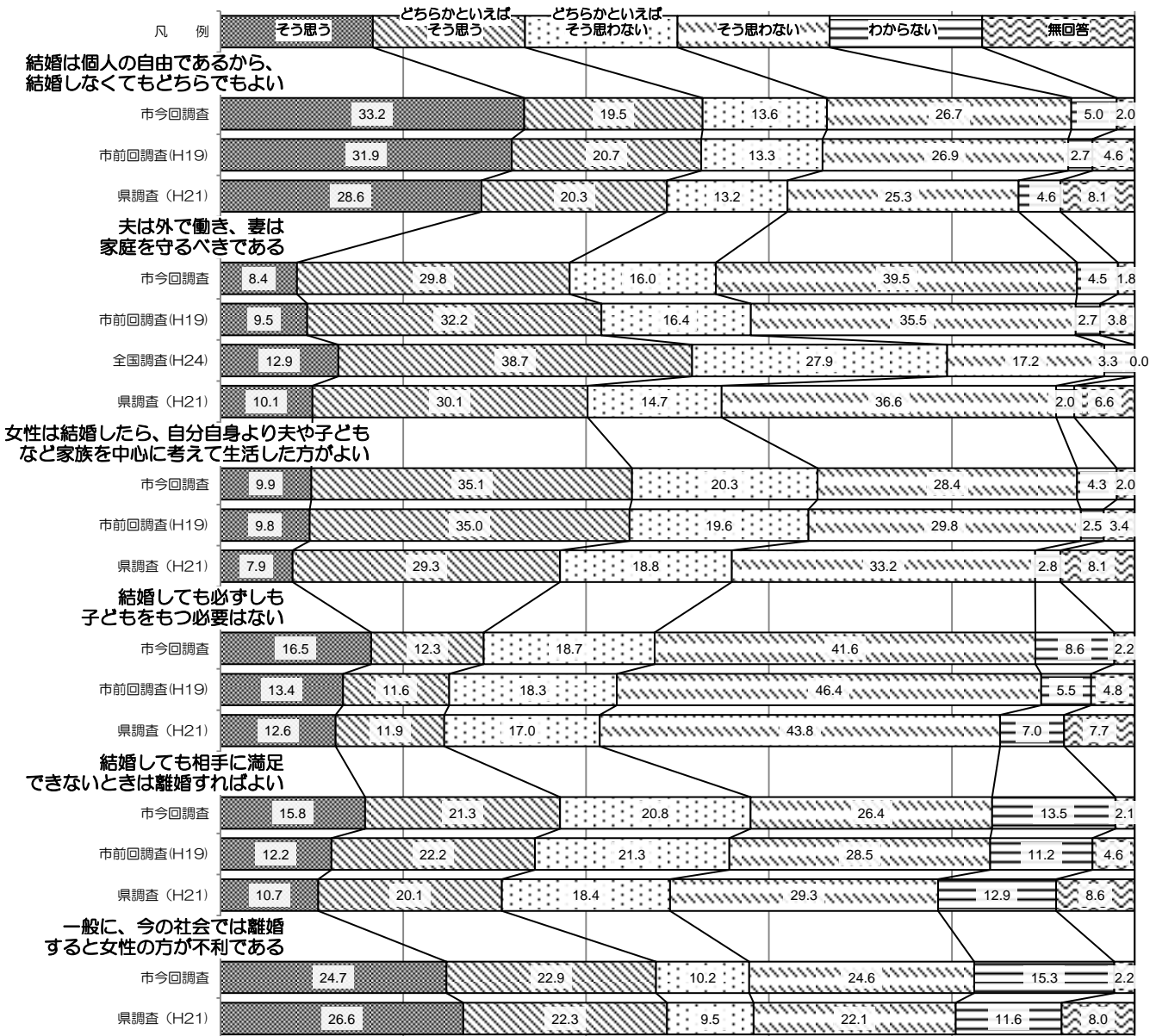
#### <前回調査、全国調査、県調査との比較>

○前回調査と比較して、6つの質問項目のうち「結婚は個人の自由であるから、結婚しなくてもどちらでもよい」「結婚しても必ずしも子どもをもつ必要はない」「結婚しても相手に満足できないときは離婚すればよい」で「そう思う」の割合が若干増加しています。

○全国調査と比較して、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」において、賛成派（「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」の合計）の割合で13ポイント程度低くなっています。

問8 結婚・家庭・離婚に関する考え方 <前回調査、全国調査、県調査との比較>

単位：%



<考察>

○調査結果から、性別や年代により考え方に大きなばらつきが見られ、個人個人の価値観の多様化が進んでいるものと推察されます。

○全国調査と比較して、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」において、賛成の割合で13ポイント程度の差がみられることから、本市では「夫は仕事、妻は家庭」の意識が比較的低いと言えます。

3. 「子どもの教育」について

**子どもの教育に関する考え方**

親の子どもの教育（進学）に関する考え方には【女の子】と【男の子】の場合で差があり、【女の子】の「大学」への進学は前回調査よりも増加していますが、【男の子】の「大学」への進学と比べ割合は低く、大きな開きがあります。

問9 あなたは、お子さんにどの程度の教育を受けさせたいと思いますか。ご自分に女の子と男の子がいると仮定して、あてはまるものをそれぞれ1つ選んで、回答欄に番号をご記入ください。

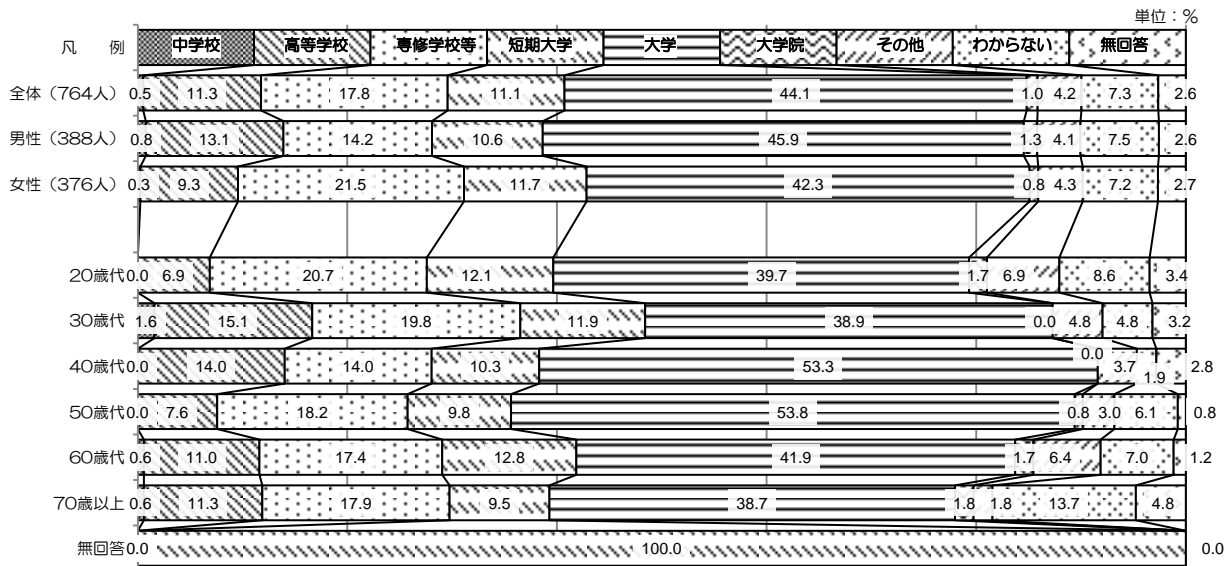
<全体>

- 【女の子】の場合では、「短期大学」までの進学の割合が 40.7%となっており、【男の子】の場合（20.9%）に比べ 20 ポイント程度多くなっています。【女の子】の「大学」進学の割合は 44.1%となっています。
- 【男の子】の場合では、「大学」進学の割合が 59.9%と一番多くなっています。

<年代別>

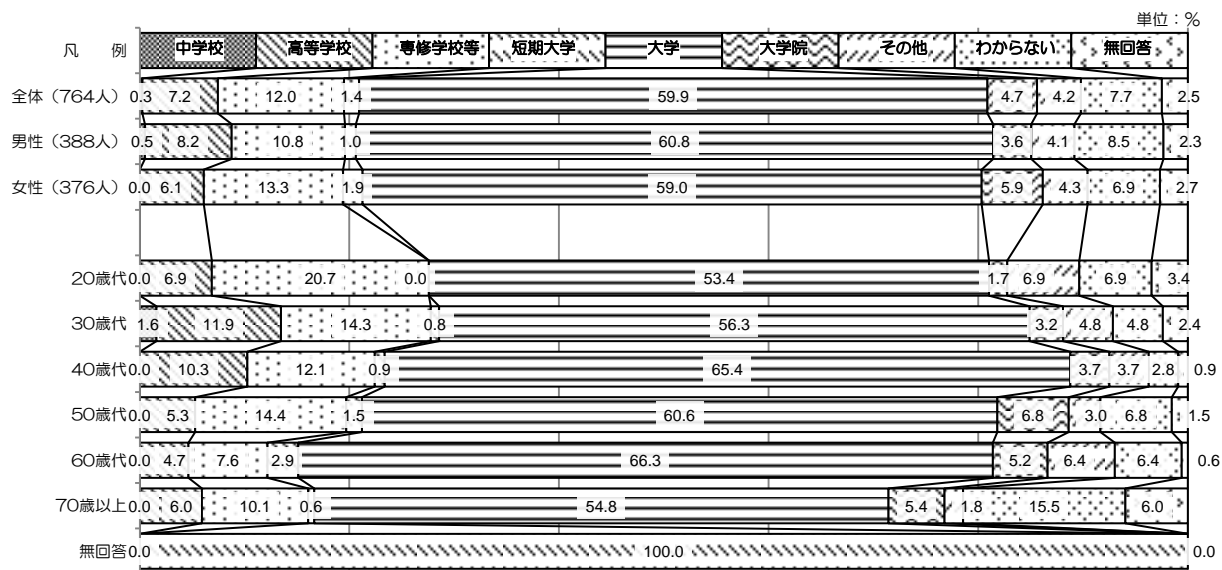
○年代による考え方に大きな違いは見られませんが、比較的若い年代で「高等学校」や「各種学校・専修学校」までの進学の割合が多くなっています。

問9 子どもの教育に関する考え方 <女の子の場合>



(その他の回答)  
 ・子ども本人のやる気や希望を尊重する (16人)  
 ・家庭の事情 (経済状況など) による (2人)

問9 子どもの教育に関する考え方 <男の子の場合>



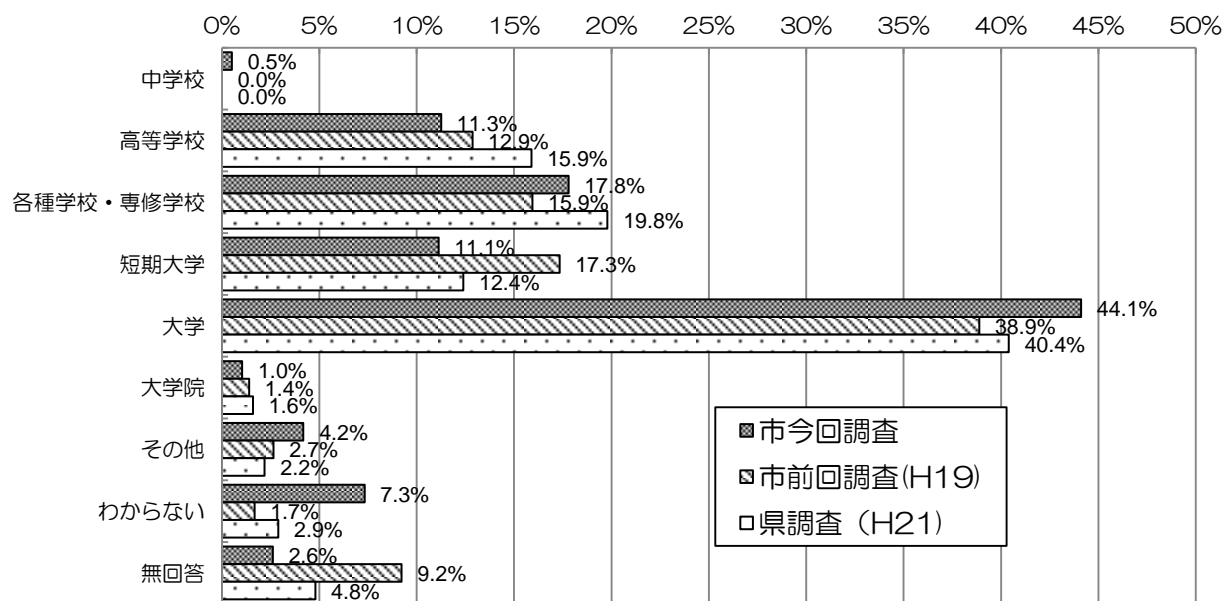
(その他の回答)

- ・子ども本人のやる気や希望を尊重する (16人)
- ・家庭の事情 (経済状況など) による (2人)

<前回調査、県調査との比較>

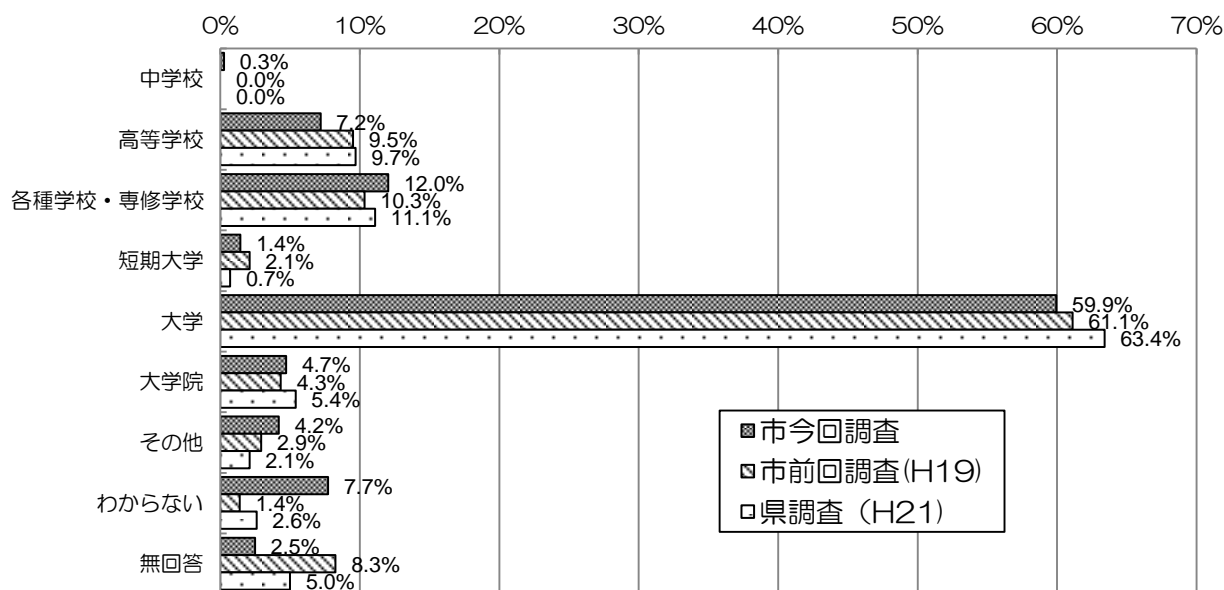
○前回調査と比較して、【女の子】の場合では「高等学校」「短期大学」が減少し、「大学」進学が増加しています。【男の子】の場合では、「各種学校・専修学校」が微増し、「大学」が微減しています。  
○県調査と比較しても同様の傾向となっています。

問9 子どもの教育に関する考え方 <女の子の場合/前回調査、県調査との比較>



### 第3章 調査結果の概要と分析

問9 子どもの教育に関する考え方 <男の子の場合/前回調査、県調査との比較>



**<考察>**

○調査結果から、【女の子】においても大学までの進学を望む傾向は高まっていますが、短期大学までの割合も比較的多く、【男の子】の大学進学までの場合と比べて25ポイント程度の差があり、親の子ども性別による教育（進学）に関する考え方には差があることが読み取れます。

4. 「職業観」について

**女性の就業のあり方**

男女ともに「就業継続型」の考え方が一番多くなっており、「共働き」に対する希望が比較的高いことが推察されます。

問 10 一般的に女性が職業をもつことについて、あなたはどのようにお考えになりますか。あてはまるものを1つ選んで、回答欄に番号をご記入ください。

<全体>

○7つの選択肢のうち、「子どもができて、ずっと職業を続ける方がよい（就業継続型）」が42.7%と一番多くなっており、次いで「子どもができれば、大きくなったら再び職業をもつ方がよい（中断再就職型）」が36.3%となっています。

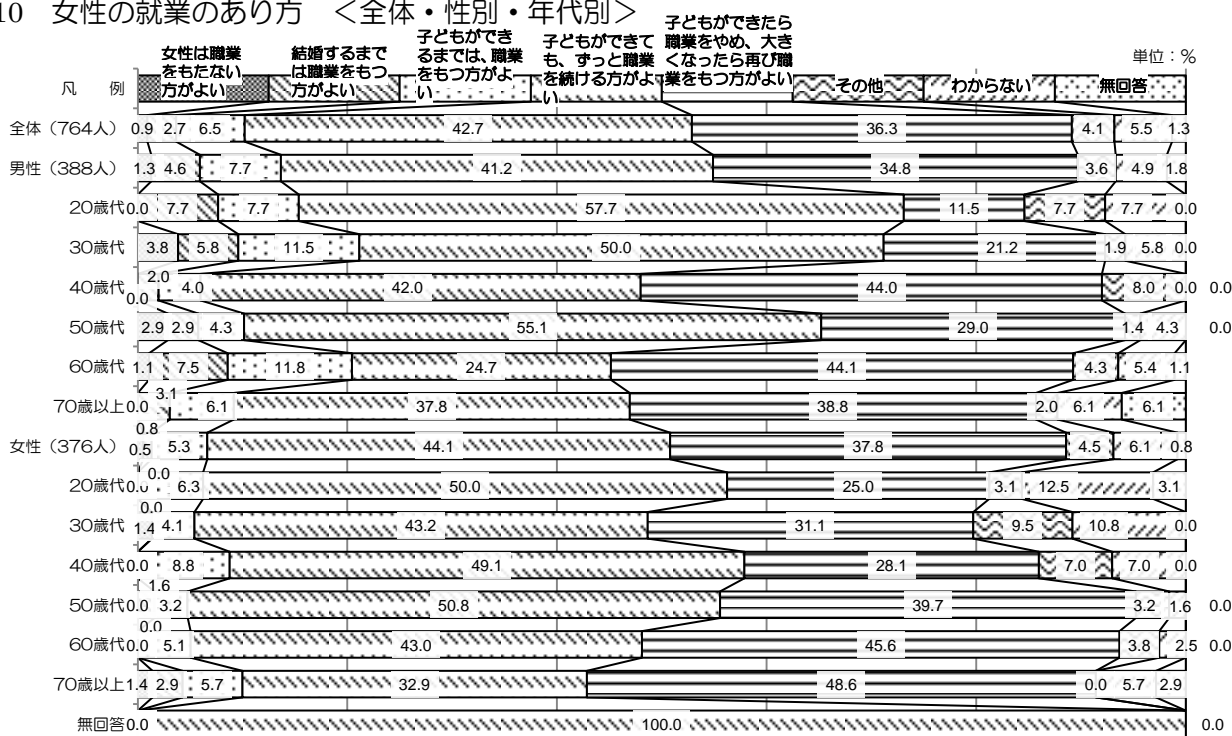
<性別>

○男女ともに「子どもができて、ずっと職業を続ける方がよい（就業継続型）」が一番多く、次いで順に「子どもができれば、大きくなったら再び職業をもつ方がよい（中断再就職型）」が多くなっており、性別による考え方に大きな違いはみられませんが、男性において「結婚するまでは職業をもつ方がよい（結婚退職型）」が女性の回答よりも若干多くなっています。

<年代別>

○就業継続型が男性の20歳代、30歳代及び50歳代で50%を超えており、女性においても20歳代、40歳代及び50歳代で半数近くの回答割合となっています。また、女性において中断再就職型が年代が上がるにつれて増加しています。

問 10 女性の就業のあり方 <全体・性別・年代別>



### 第3章 調査結果の概要と分析

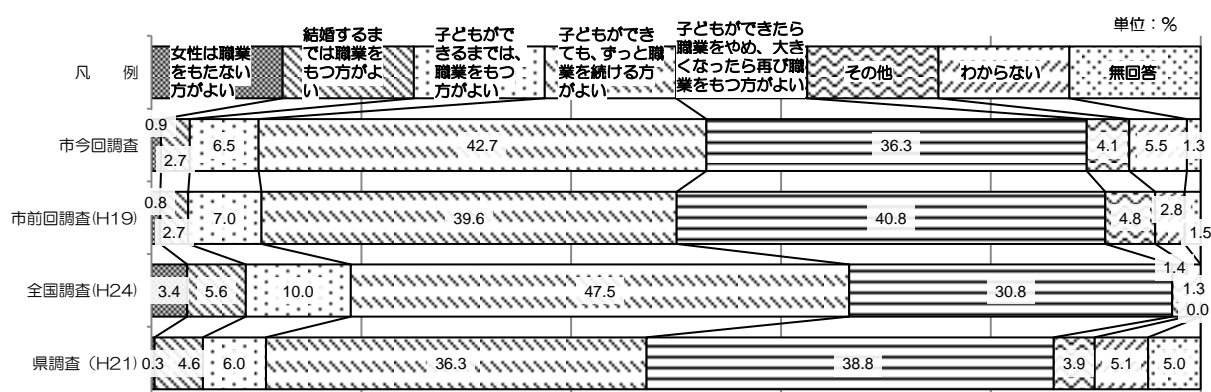
(その他の回答)

- ・相手の職業、家庭環境などにより、その時々でベストな選択をする（13名）
- ・個人の自由（6名）

#### <前回調査、全国調査、県調査との比較>

○前回調査と比較して、就業継続型が若干増加し、中断再就職型が減少しています。全国調査と比較すると、就業継続型が4.8%少なく、中断再就職型が5.5%多くなっています。県調査と比較すると、就業継続型が6.4%多くなっています。全国調査では、“職業をもたない方がよい”や“結婚や子どもができるまで仕事をもつ方がよい”の合計が19%と多くなっています。

#### 問10 女性の就業のあり方 <前回調査、全国調査、県調査との比較>



#### <考察>

○調査結果から、男女ともに“就業継続型”の考え方が一番多くなっており、特に若い世代で多くなっています。全国調査と比べ、「共働き」を希望する割合が比較的高いことが推察されます。

○ワーク・ライフ・バランス（仕事と生活の調和）の推進や、男女が共に働きやすい職場環境の整備など、男女が共に能力を發揮し、生涯にわたって働き続けることができる施策の充実などが今後も必要と考えられます。



5. 「男女の人権（セクシュアル・ハラスメント／配偶者等からの暴力）」について

**セクシュアル・ハラスメントの被害経験**

3割弱の女性においてセクハラ被害経験があるが、その多くは被害を相談していません。

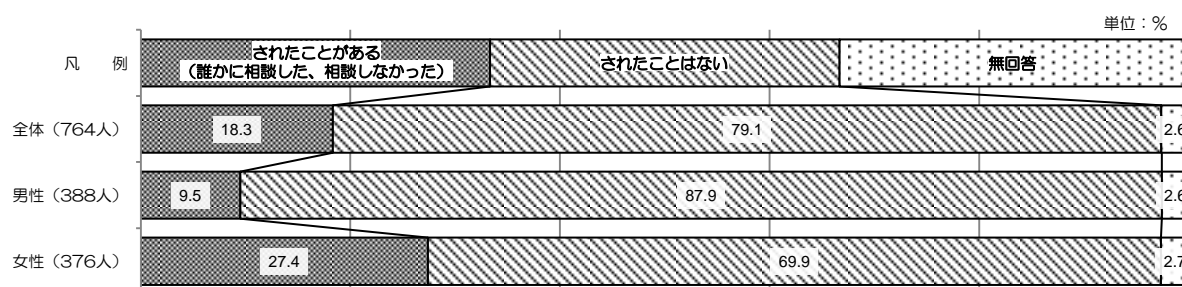
問 11 あなたは、これまでに、職場や学校、地域などで、次にあげるセクシュアル・ハラスメント（セクハラ）をされたことがありますか。あてはまるものをそれぞれ1つ選んで、回答欄に番号をご記入ください。

※セクシュアル・ハラスメント（セクハラ）とは … 相手を不快にさせる性的な言動。性的嫌がらせ。言葉や行為による性的な働きかけだけでなく、人格を傷つける言動もこれにあたる。

<全体>

○全体の18.3%が被害経験がある（されたことがある）と回答しています。男性の1割弱、女性の3割弱が被害経験があると回答しており、女性の方が多くなっています。

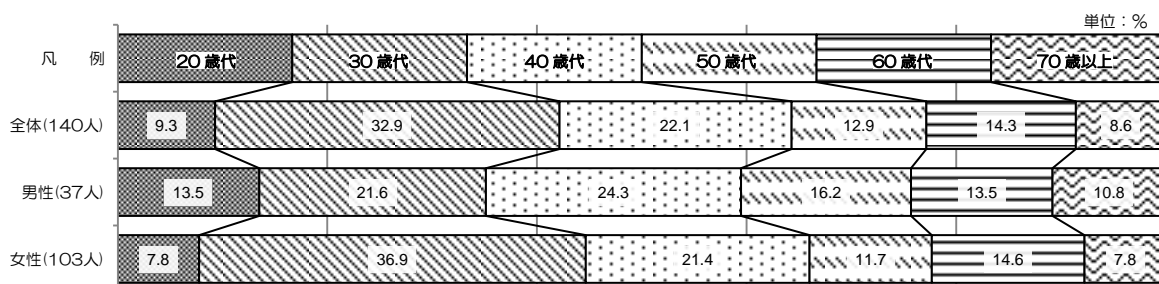
問 11 セクシュアル・ハラスメントの被害経験 <設問項目5つのうち1つでもセクハラを「されたことがある、誰かに相談した、相談しなかった」もしくは「されたことがあるが、相談しなかった」と回答した人の割合>



<年代別>

○被害経験者のうち、年代別にみると男性においては40歳代、女性においては30歳代の被害経験が多くなっています。

問 11 セクシュアル・ハラスメントの被害経験 <被害経験者の年代別内訳>



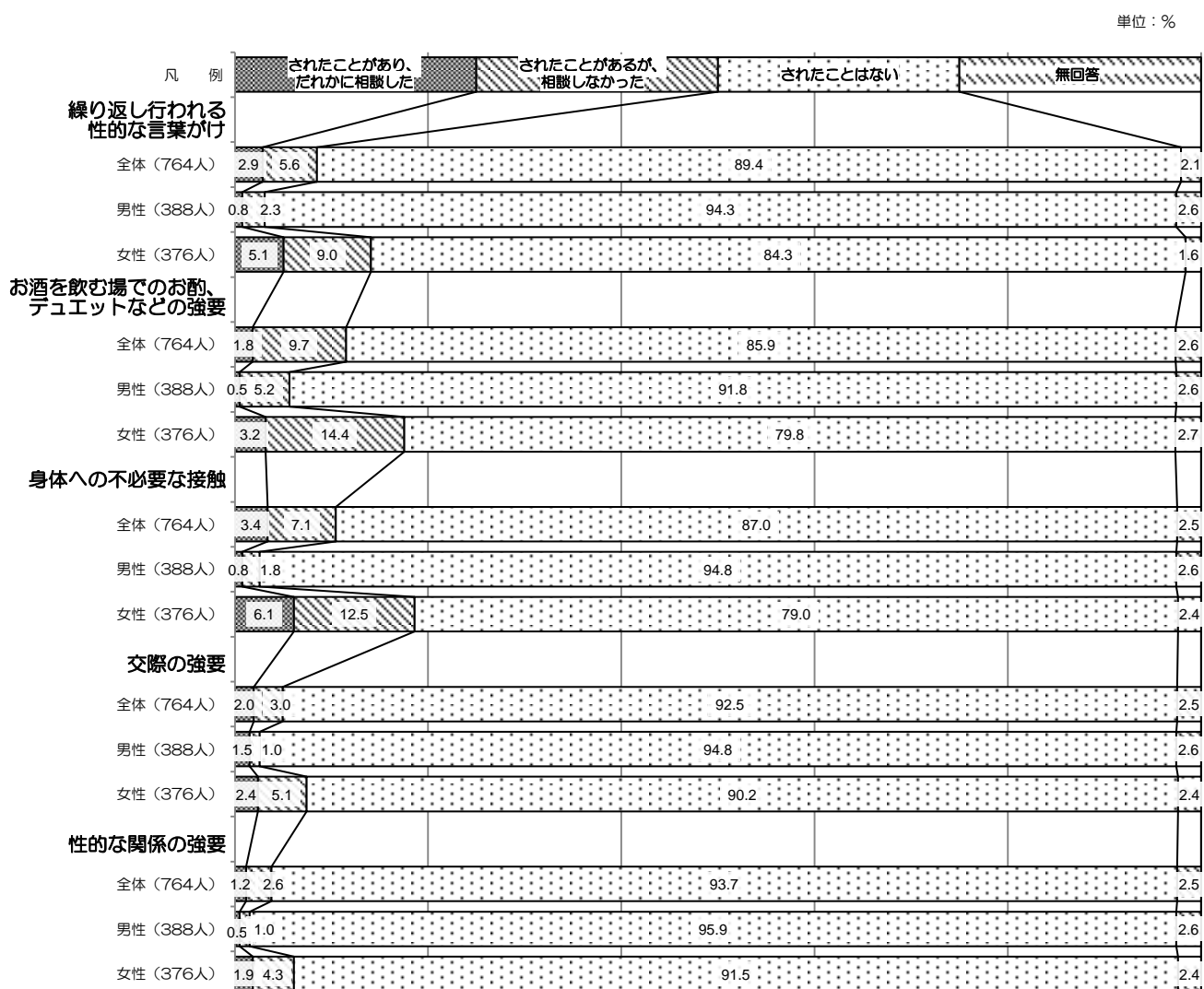
### 第3章 調査結果の概要と分析

#### <設問項目別>

○被害の内訳をみると「お酒を飲む場での酌、デュエットなどの強要」が11.5%と一番多く、次いで順に「身体への不必要な接触（10.5%）」「繰り返し行われる性的な言葉がけ（8.5%）」などとなっています。いずれの項目においても、女性の被害経験が多くなっています。

○被害者のうち、「お酒を飲む場での酌、デュエットなどの強要」被害では8割強が、その他の被害では6割から7割弱の人が被害を相談していません。

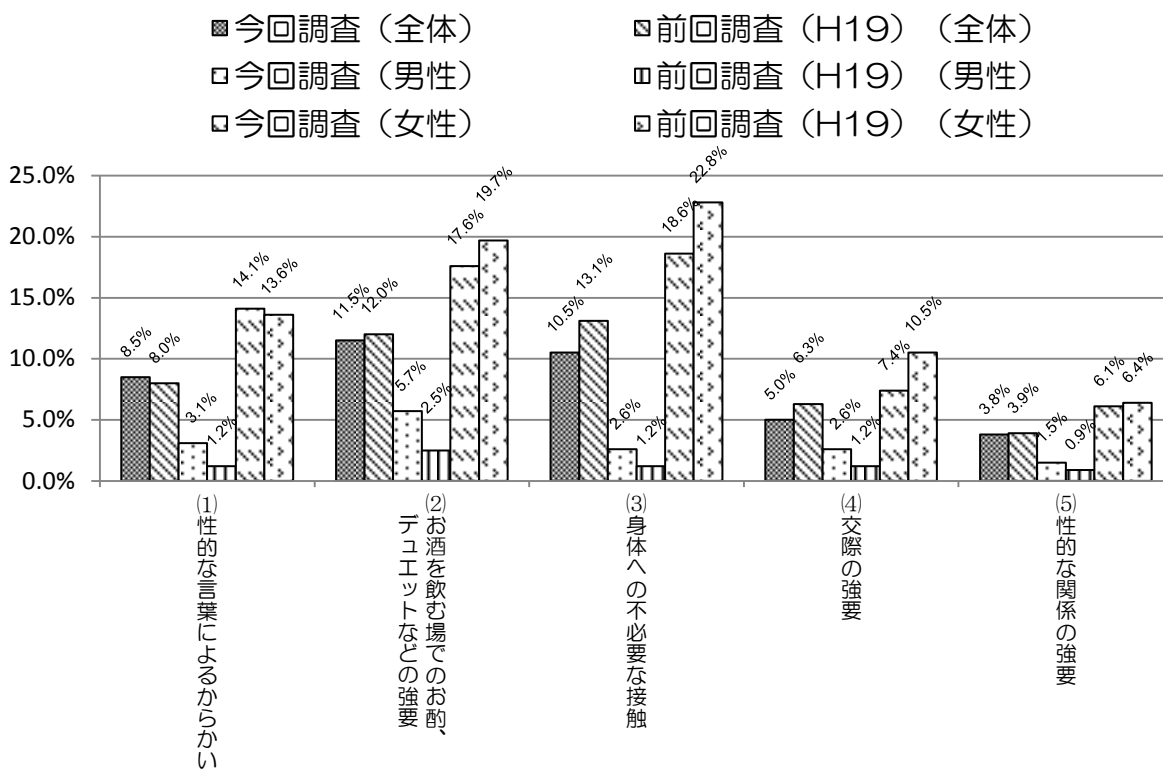
#### 問11 セクシュアル・ハラスメントの被害経験 <設問項目別、性別>



#### <前回調査との比較>

○前回調査と比較して、大きな差はみられませんが、男性においてはどの質問項目も回答数値が上がっており、また女性においては「繰り返し行われる性的な言葉がけ」を除いて数値が下がっています。

問 11 セクシュアル・ハラスメントの被害経験 <前回調査との比較>



**セクシュアル・ハラスメント被害を相談しなかった理由**

被害者の多くは被害を重く受け止めず、「相談しても仕方がない」「自分がかまんすればよい」と感じています。

問 11-1 なぜ相談しなかったのか（できなかったのか）あてはまるものをすべて選んで、回答欄に番号をご記入ください。

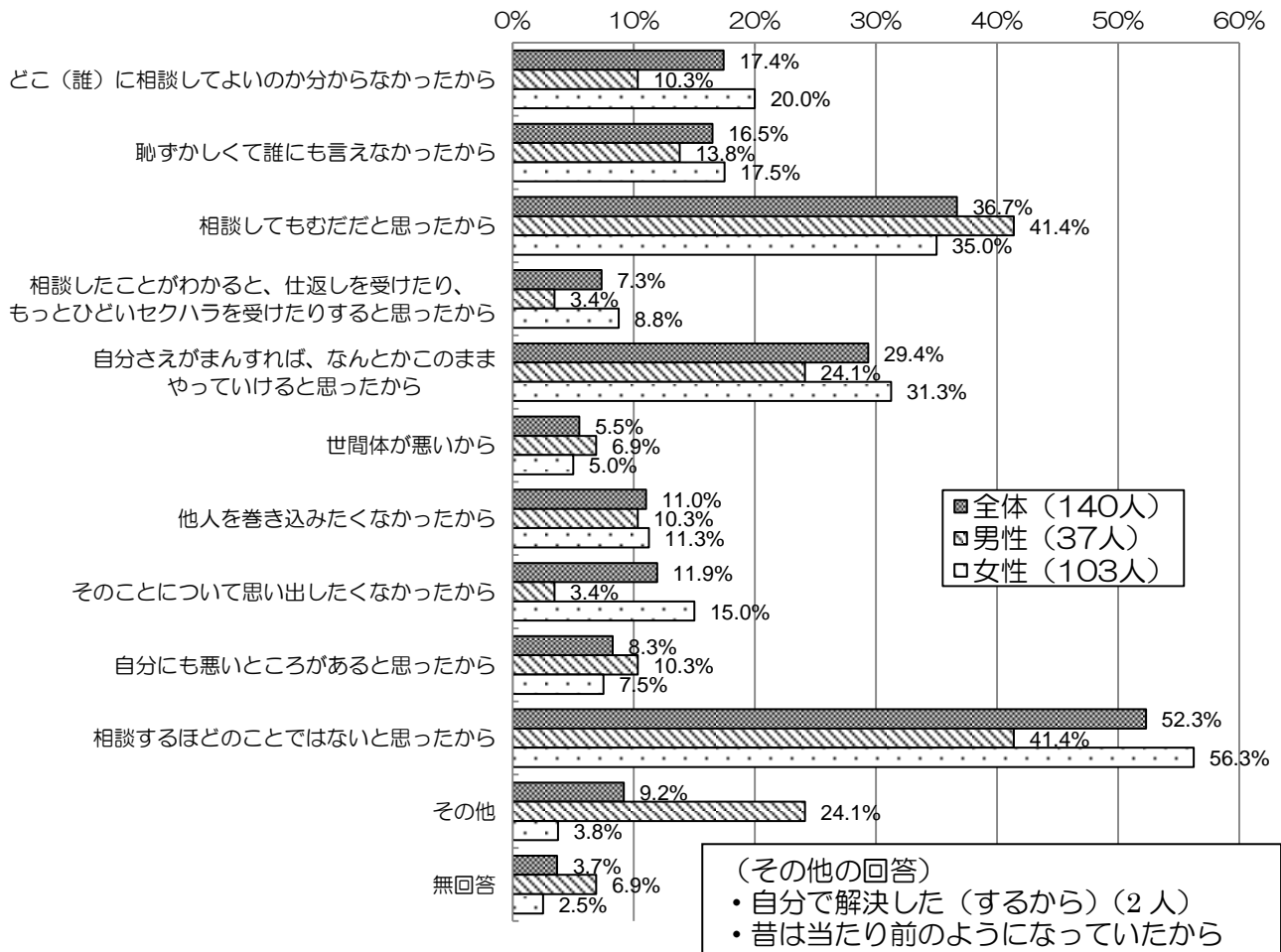
**<全体>**

○11 の選択肢のうち、「相談するほどのことではないと思ったから」が 52.3%と一番多く、次いで順に「相談してもむだだと思ったから（36.7%）」「自分さえがまんすれば、なんとかこのままやっていると来たから（29.4%）」などと続いています。全体の 17.4%は「どこ（誰）に相談してよいのか分からなかった」と回答しています。

**<性別>**

○性別でみると、男性は「相談してもむだだと思ったから」や「世間体が悪いから」などが女性の回答よりも多くなっています。女性は「どこ（誰）に相談してよいのか分からなかった」「そのことについて思い出したくなかったから」「相談するほどのことではないと思ったから」で男性よりも 10 ポイントから 15 ポイント程度多く回答しています。

問 11-1 セクシュアル・ハラスメント被害を相談しなかった理由 <全体・性別>



＜考察＞（問11を含む）

○調査結果から、3割弱の女性がセクハラ被害を受けているが、その多くは被害を相談していないことが読み取れます。

○被害を相談しない理由として、多くの方が「相談しても仕方がない」「自分がかまわなければよい」と感じており、対策として相談窓口の周知や被害者支援に向けたセクハラに対する正しい理解などが必要と考えられます。

**セクシュアル・ハラスメントの加害経験**

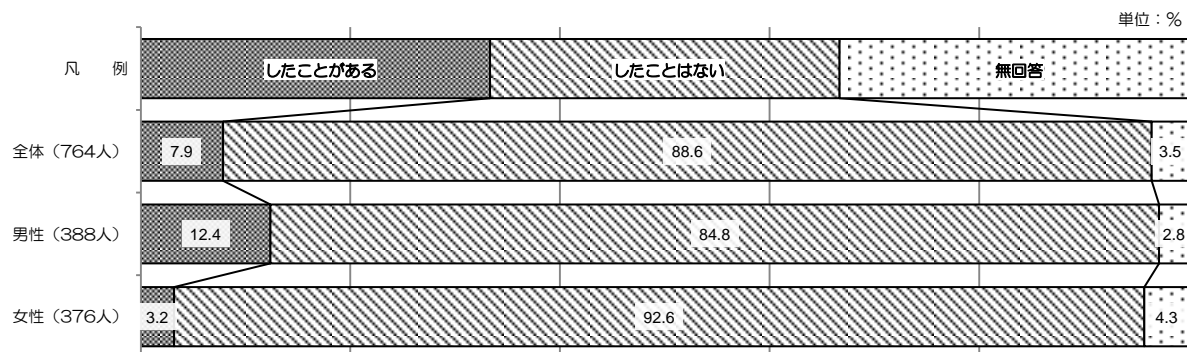
男性の1割強がセクハラに加害経験があると回答しており、「性的な言葉によるからかい」が多くなっています。

問12 あなたは、これまでに、職場や学校、地域などで、次にあげるセクシュアル・ハラスメント（セクハラ）をしたことがありますか。あてはまるものをそれぞれ1つ選んで、回答欄に番号をご記入ください。

**<全体>**

○全体の7.9%がセクハラに加害経験があると回答しています。男性の12.4%がセクハラに加害経験があると回答しています。女性においても3.2%が経験があると回答しています。

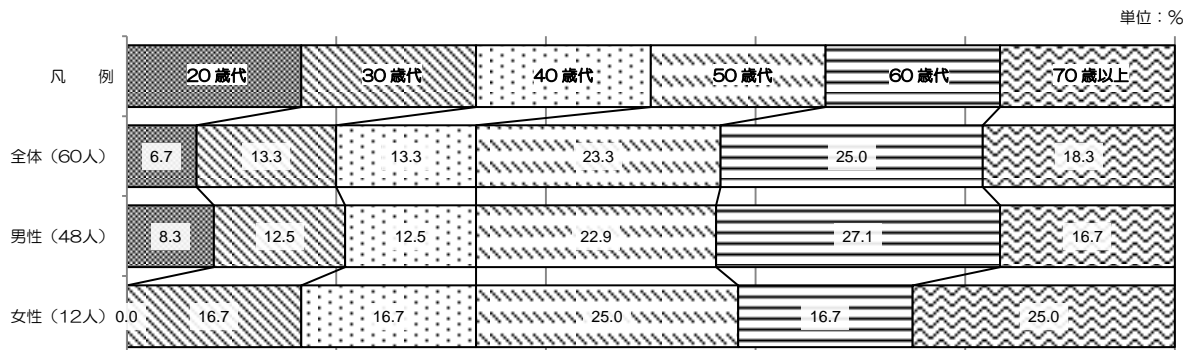
問12 セクシュアル・ハラスメントの加害経験 <設問項目5つのうち1つでもセクハラを「したことがある」と回答した人の割合>



**<年代別>**

○加害経験者のうち、年代別にみると男性においては60歳代、女性においては50歳代と70歳以上の加害経験が多くなっています。

問12 セクシュアル・ハラスメントの加害経験 <加害経験者の年代別内訳>

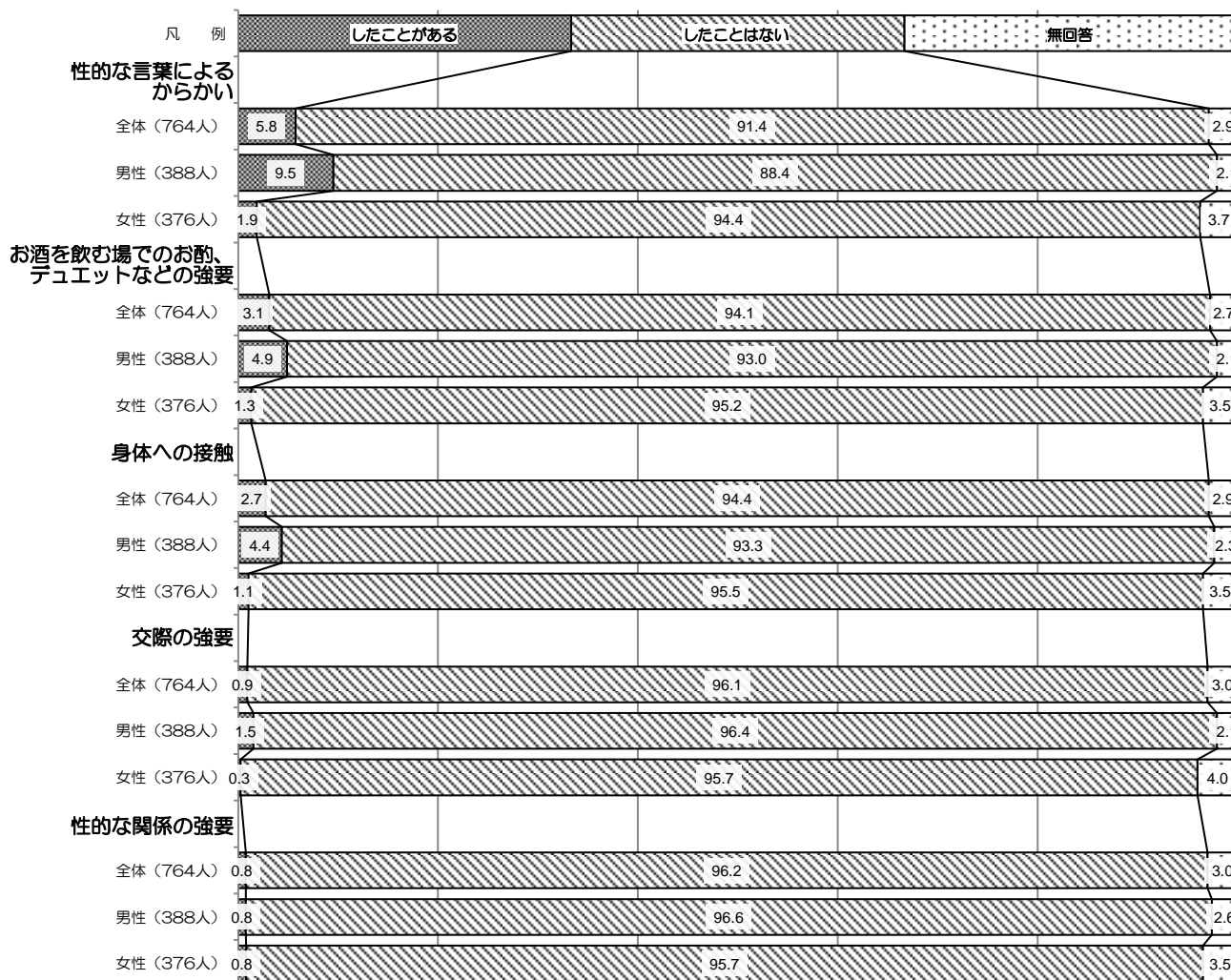


<設問項目別>

○加害の内訳をみると「性的な言葉によるからかい」が5.8%と一番多く、次いで順に「お酒を飲む場での酌、デュエットなどの強要（3.1%）」「身体への接触（2.7%）」などとなっています。いずれの項目についても、男性の加害経験が多くなっています。

問12 セクシュアル・ハラスメントの加害経験 <設問項目別>

単位：%

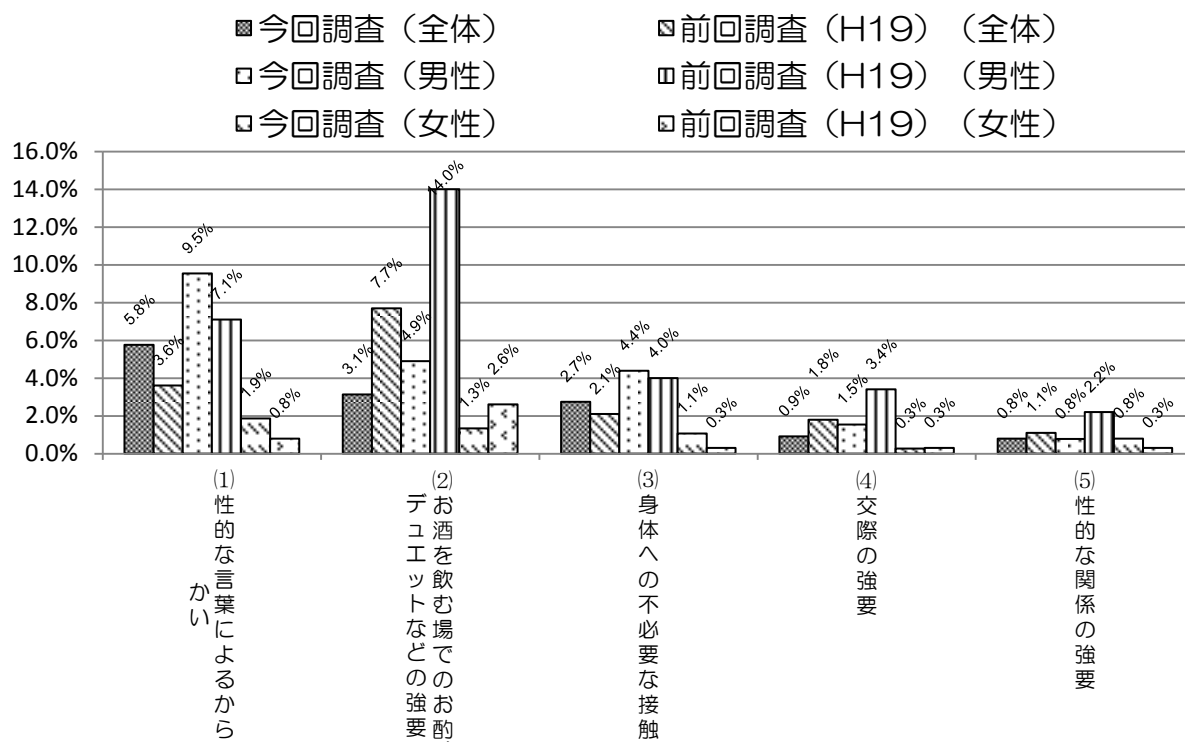


<前回調査との比較>

○前回調査と比較すると、全体的に「性的な言葉によるからかい」「身体への接触」は増え、それ以外の項目において加害の割合が減少しており、特に「お酒を飲む場での酌、デュエットなどの強要」が男性において10ポイント程度減少しています。

### 第3章 調査結果の概要と分析

#### 問12 セクシュアル・ハラスメントの加害経験 <前回調査との比較>



#### <考察>

○調査結果から、1割程度の男性がセクハラに加害経験があると回答しており、その行為としては、「性的な言葉によるからかい」が一番多く、また前回より増加しています。

○前回調査と比較して、男性において「お酒を飲む場でのお酌、デュエットなどの強要」が10ポイント程度減少していることから、お酌やデュエットの強要がセクハラにあたるという認識の高まりが要因ではないかと推察されます。



**ドメスティック・バイオレンスの被害経験**

女性の3割、男性も1割強がDVの被害経験があると回答しています。

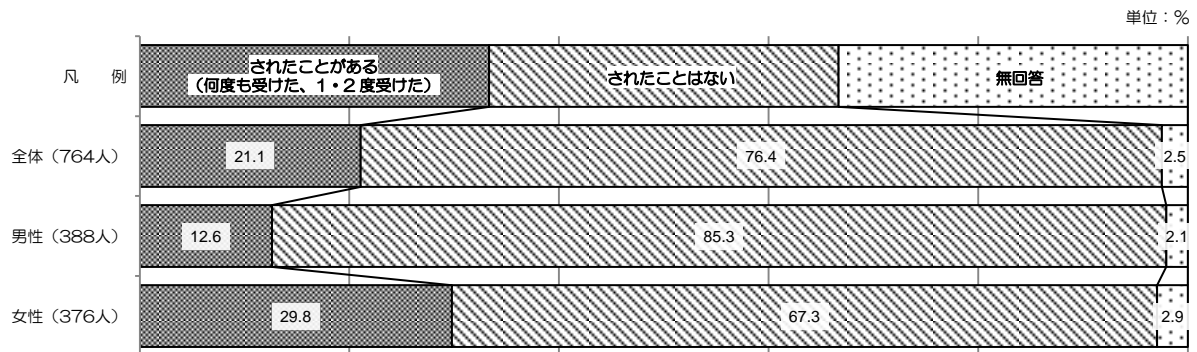
問13 あなたは、これまでに、配偶者（事実婚や別居、離別を含む）や恋人などのパートナーから、次にあげるようなドメスティック・バイオレンス（DV）を受けたことはありますか。あてはまるものをそれぞれ1つ選んで、回答欄に番号をご記入ください。

※ドメスティック・バイオレンス（DV）とは … 「夫婦（恋人）間暴力」のこと。身体に対する暴力だけでなく、以下のような心身に有害な影響を及ぼす言動は、DVであり犯罪です。

<全体>

○全体の21.1%が被害経験がある（されたことがある）と回答しています。性別で見ると、男性の1割強、女性の約3割が被害経験があると回答しており、女性の方が多くなっています。

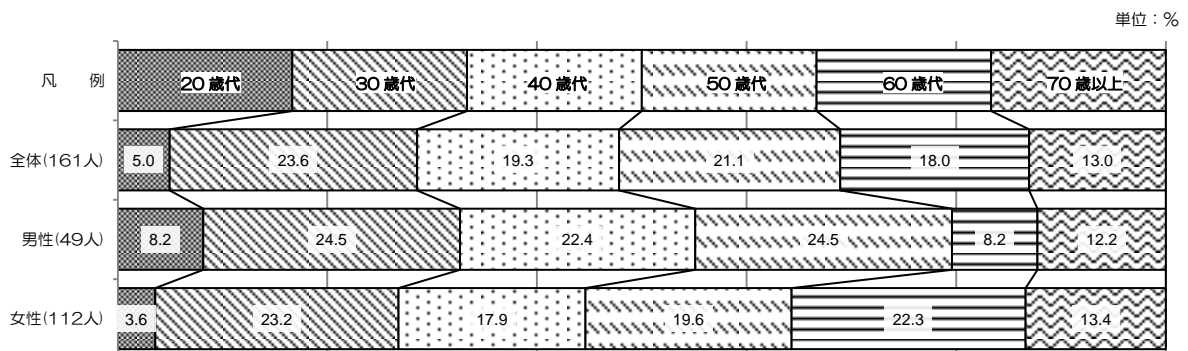
問13 ドメスティック・バイオレンスの被害経験 <設問項目5つのうち1つでもDVを「されたことがある、何度も受けた」もしくは「されたことがある、1・2度受けた」と回答した人の割合>



<年代別>

○被害経験者のうち、年代別にみると男性においては30歳代と50歳代、女性においては30歳代の被害経験が多くなっています。

問13 ドメスティック・バイオレンスの被害経験 <被害経験者の年代別内訳>



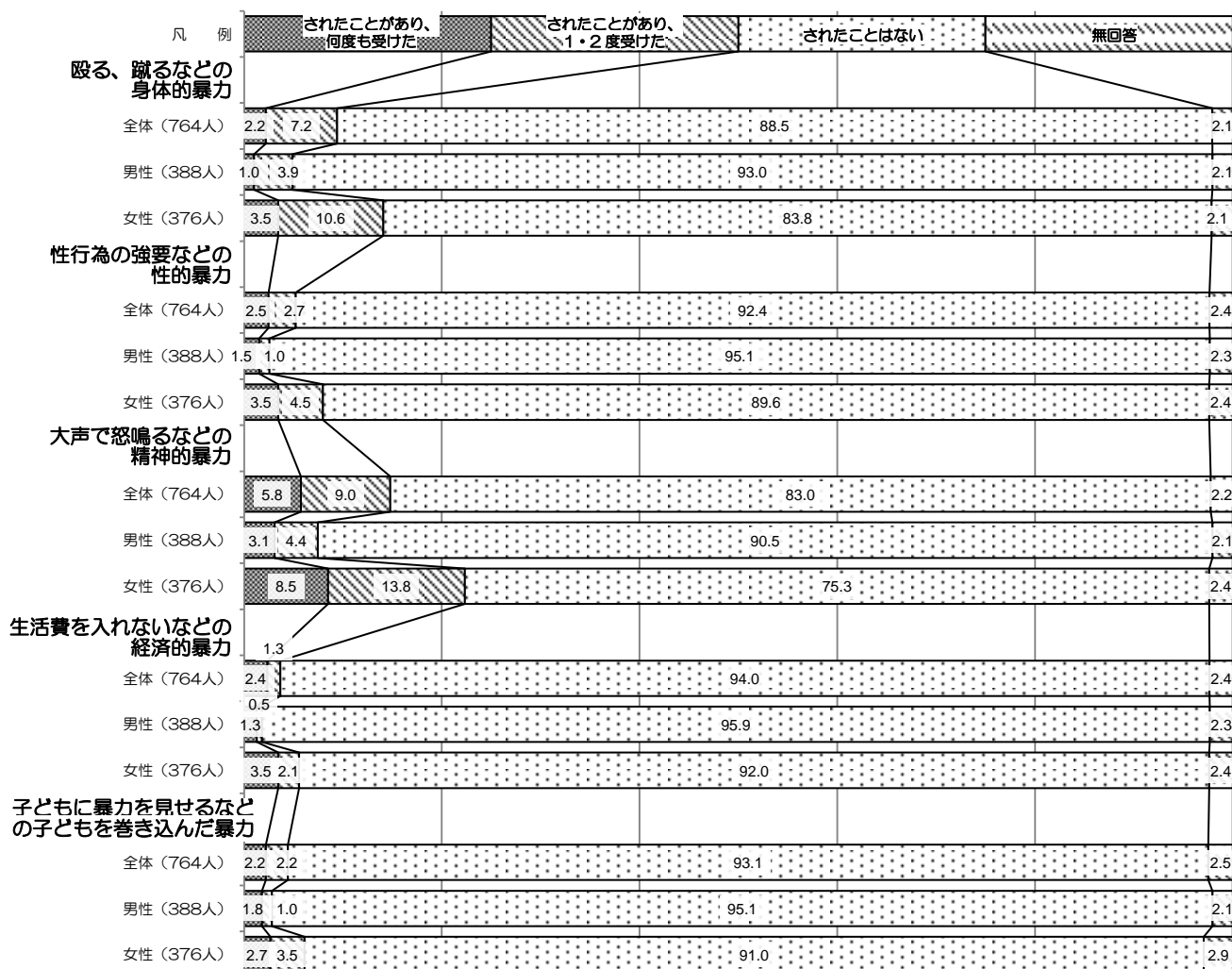
### 第3章 調査結果の概要と分析

#### <設問項目別>

○被害の内訳をみると「大声で怒鳴るなどの精神的暴力」が14.8%（「されたことがあり、何度も受けた」と「されたことがあり、1・2度受けた」の合計、以降同じ）と一番多く、次いで順に「殴る、蹴るなどの身体的暴力（9.4%）」「性行為の強要などの性的暴力（5.2%）」などとなっています。

#### 問13 ドメスティック・バイオレンスの被害経験 <設問項目別>

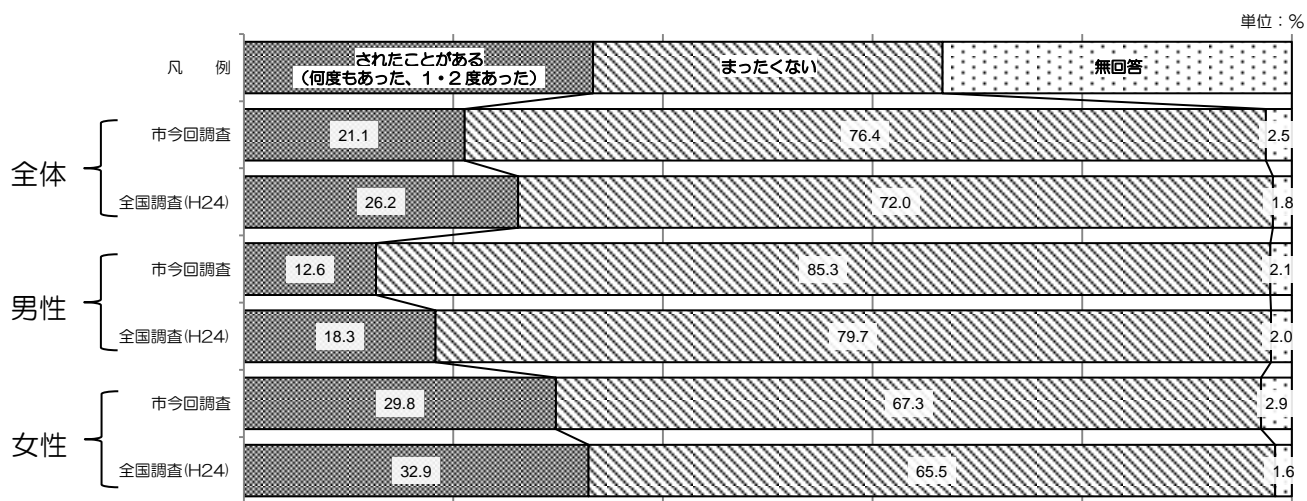
単位：%



#### <全国調査との比較>

○全国調査と比較すると、被害経験はいずれも低いものの、女性の割合が男性より高いなど傾向としてはほぼ同じになっています。

問13 ドメスティック・バイオレンスの被害経験 <全国調査との比較>



**ドメスティック・バイオレンスを相談した相手**

被害経験者のうち、男女ともに3割の人は「どこ（誰）にも相談しなかった（できなかった）」と回答しています。相談先としては家族や友人が多く、公的機関への相談は非常に少なくなっています。

問 13-1 あなたは、これまでに、誰かに打ち明けたり相談したりしましたか。あてはまるものをすべて選んで、回答欄に番号をご記入ください。

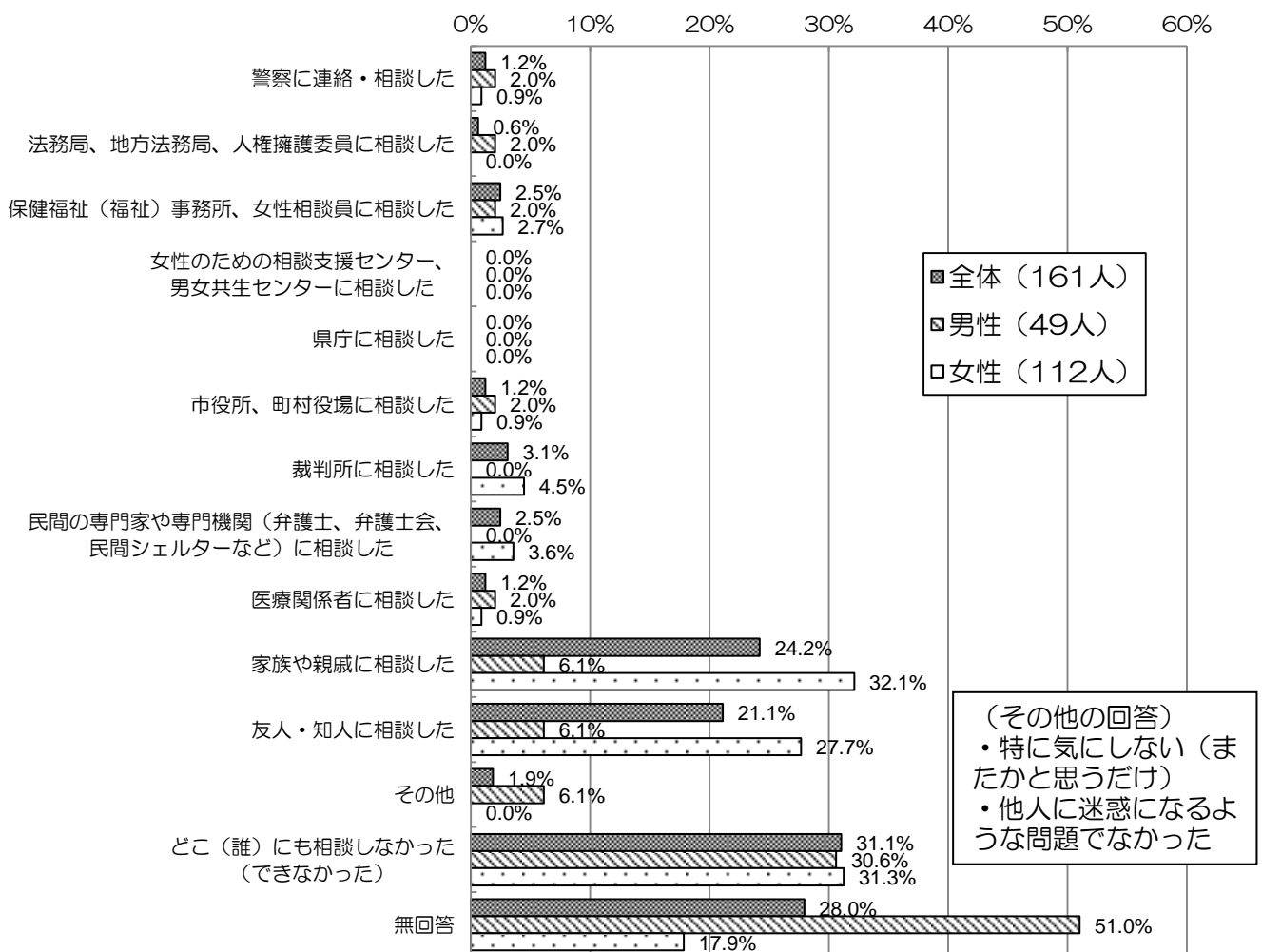
<全体>

○13の選択肢のうち、「どこ（誰）にも相談しなかった（できなかった）」が31.1%と一番多くなっています。次いで順に「家族や親戚に相談した（24.2%）」「友人・知人に相談した（21.1%）」などとなっています。それ以外の公的機関などへの相談は1ケタ以下となっており、非常に少なくなっています。

<性別>

○被害経験者のうち、女性においては約3割がそれぞれ「家族や親戚」や「友人・知人」に相談していますが、男性においては同項目については6%程度と女性に比べ少なく、また、無回答が多くなっています。

問 13-1 ドメスティック・バイオレンスを相談した相手 <DVの被害経験者の相談先内訳>



**ドメスティック・バイオレンスを相談しなかった理由**

被害者の多くは「相談するほどのことではない」「相談してもむだだと思った」との理由で相談をしていません。また、「自分がかまんすればよい」「自分にも悪いところがあった」と、現状からの脱却をあきらめている状況が推察されます。

問 13-2 なぜどこ（誰）にも相談しなかったのか（できなかったのか）あてはまるものをすべて選んで、回答欄に番号をご記入ください。

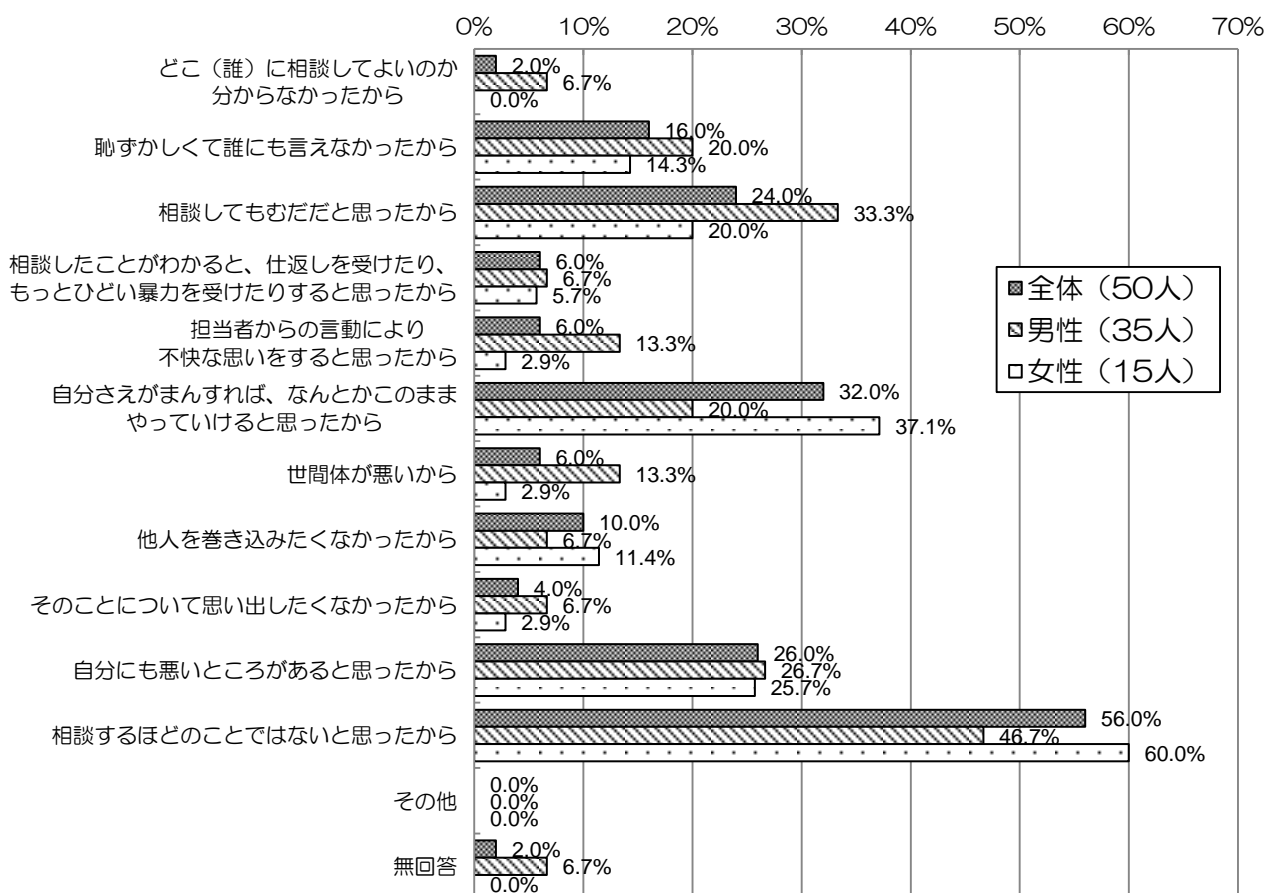
<全体>

○12 の選択肢のうち、「相談するほどのことではないと思ったから」が 56.0%と一番多く、次いで順に「自分さえがまんすれば、なんとかこのままやっていたらよかったから（32.0%）」「自分にも悪いところがあると思ったから（26.0%）」「相談してもむだだと思ったから（24.0%）」「恥ずかしくて誰にも言えなかったから（16.0%）」などとなっています。

<性別>

○12 の選択肢のうち、「相談するほどのことではないと思ったから」「自分さえがまんすれば、なんとかこのままやっていたらよかったから」は女性に多く、「相談してもむだだと思ったから」「担当者からの言動により不快な思いをすと思ったから」「世間体が悪いから」は男性に多く、10ポイント以上の差がみられます。

問 13-2 ドメスティック・バイオレンスを相談しなかった理由 <相談しなかった理由の内訳>



#### ＜考察＞（問13、問13-1を含む）

○調査結果から、女性の約3割、男性の1割強がDVの被害経験があると回答しており、行為としては、「大声で怒鳴るなどの精神的暴力」が一番多くなっています。

○被害経験者のうち、男女ともに3割の人はどこにも相談していません。また被害の相談をした人のうち、相談相手としては家族や友人が多く、公的機関への相談は非常に少なくなっています。

○相談しなかった理由としては、「相談するほどのことではない」「相談してもむだだと思った」が多く、また、「自分がかまふればよい」「自分にも悪いところがあった」と、相談をする前に被害を受けている状況から逃れることを諦めてしまっている状況が推察されます。

○これらのことから、相談窓口の周知を含め相談しやすい環境の整備の他、DVに対し正しく理解するための啓蒙を図り、DV被害者を一人でも減らしていく取り組みが必要になると考えられます。

### ドメスティック・バイオレンスの加害経験

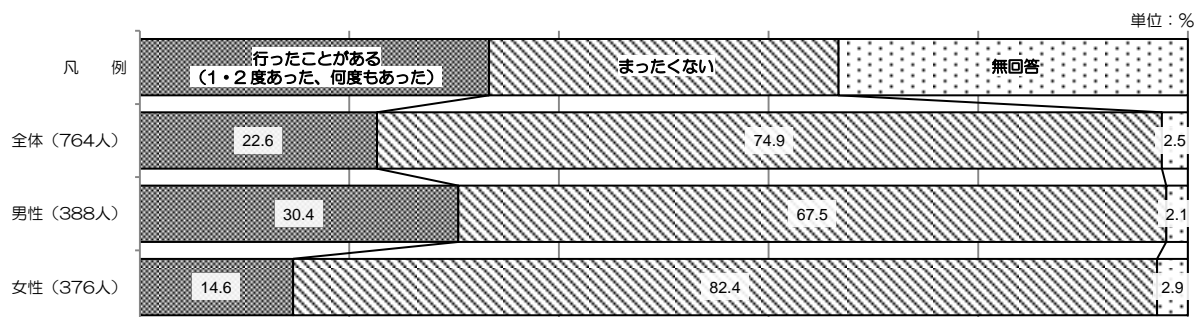
男性の3割、女性も1割強がDVの加害経験があると回答しており、「大声で怒鳴るなどの精神的暴力」が多くなっています。

問14 あなたは、これまでに、配偶者（事実婚や別居、離別を含む）や恋人などのパートナーに対して、次にあげるようなドメスティック・バイオレンス（DV）を行ったことはありますか。あてはまるものをそれぞれ1つ選んで、回答欄に番号をご記入ください。

#### <全体>

○全体の2割強がDVの加害経験がある（行ったことがある）と回答しています。性別にみると男性の30.4%がDVの加害経験があると回答しています。女性においても14.6%が経験があると回答しています。

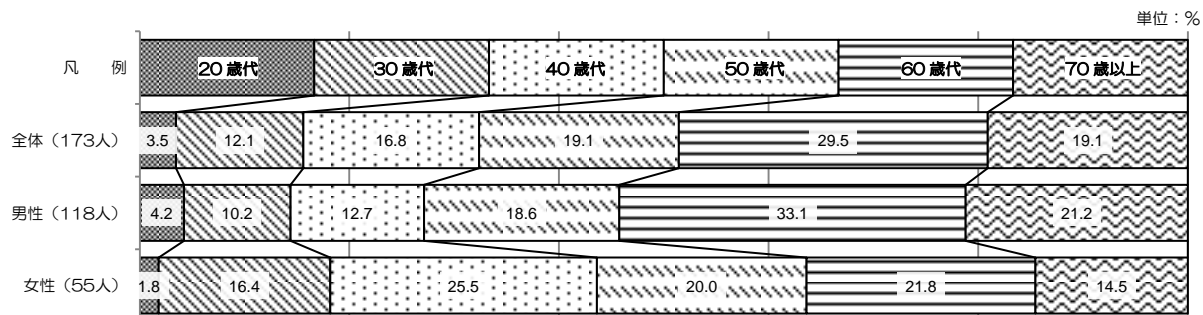
問14 ドメスティック・バイオレンスの加害経験 <設問項目5つのうち1つでもDVを行ったことが「1・2度あった」もしくは「何度もあった」と回答した人の割合>



#### <年代別>

○加害経験者のうち、年代別にみると男性においては60歳代、女性においては40歳代の加害経験が多くなっています。

問14 ドメスティック・バイオレンスの加害経験 <加害経験者の年代別割合>



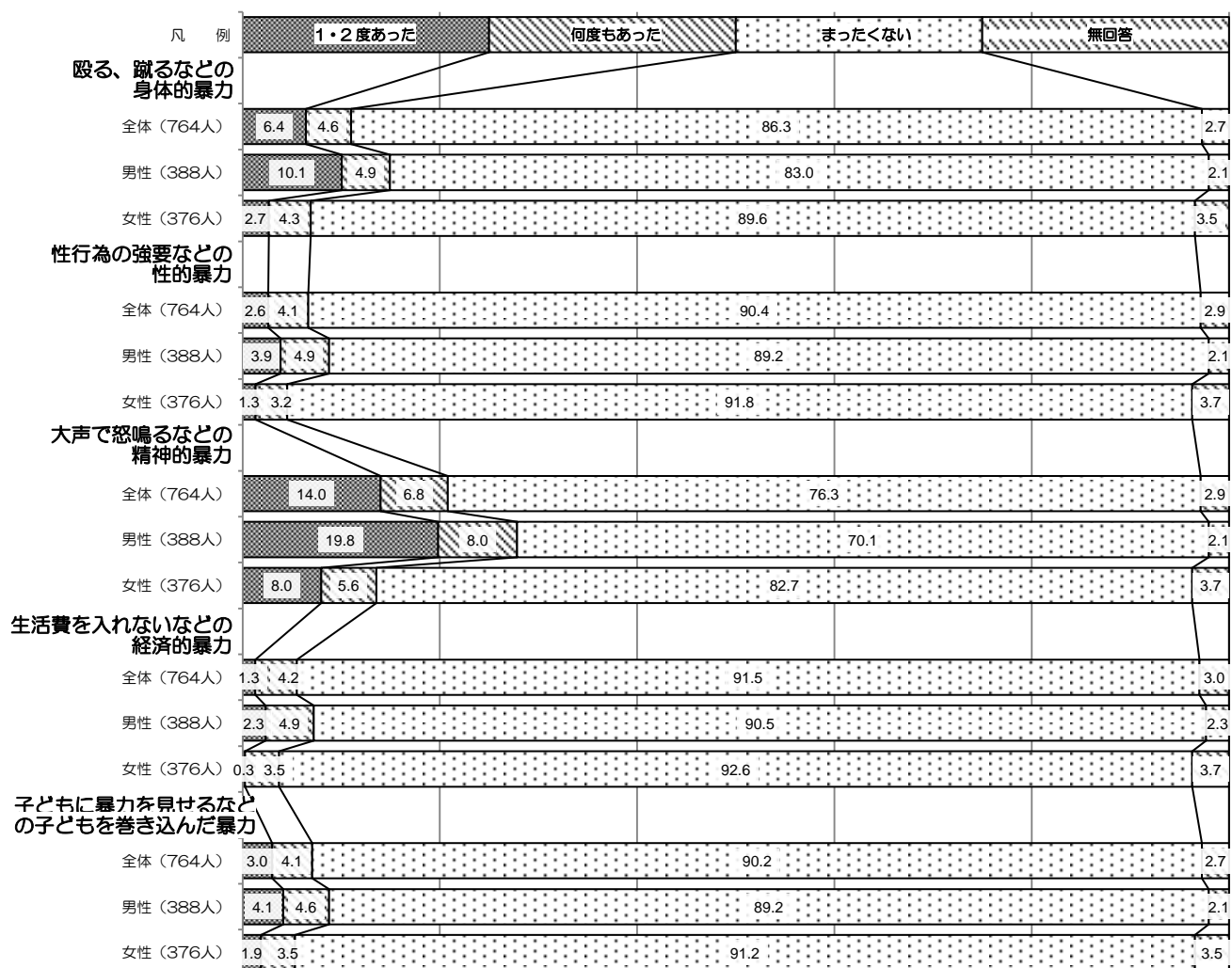
### 第3章 調査結果の概要と分析

#### <設問項目別>

○加害の内訳をみると「大声で怒鳴るなどの精神的暴力」が20.8%（「1・2度あった」と「何度もあった」の合計、以降同じ）と一番多く、次いで順に「殴る、蹴るなどの身体的暴力（11.0%）」「子どもに暴力を見せるなどの子どもを巻き込んだ暴力（7.1%）」「性行為の強要などの性的暴力（6.7%）」などとなっています。いずれの項目についても、男性の加害経験が多くなっています。

#### 問14 ドメスティック・バイオレンスの加害経験 <設問項目別>

単位：%



#### <考察>

○調査結果から、男性の3割、女性も1割強がDVの加害経験があると回答しています。

○加害の行為としては、男女ともに「大声で怒鳴るなどの精神的暴力」が一番多くなっています。

○DVの発生を防止するために、DVの問題を正しく理解してもらうための啓蒙活動をさらに図っていく必要があります。



**会津若松市女性福祉相談室の認知度**

全体の4割、女性においては5割弱が「知っている」と回答しています。

問 15 DV など女性に関わるさまざまな相談に応じるために、市では女性相談室を設けていますが、ご存知でしたか。あてはまるものを1つ選んで、回答欄に番号をご記入ください。

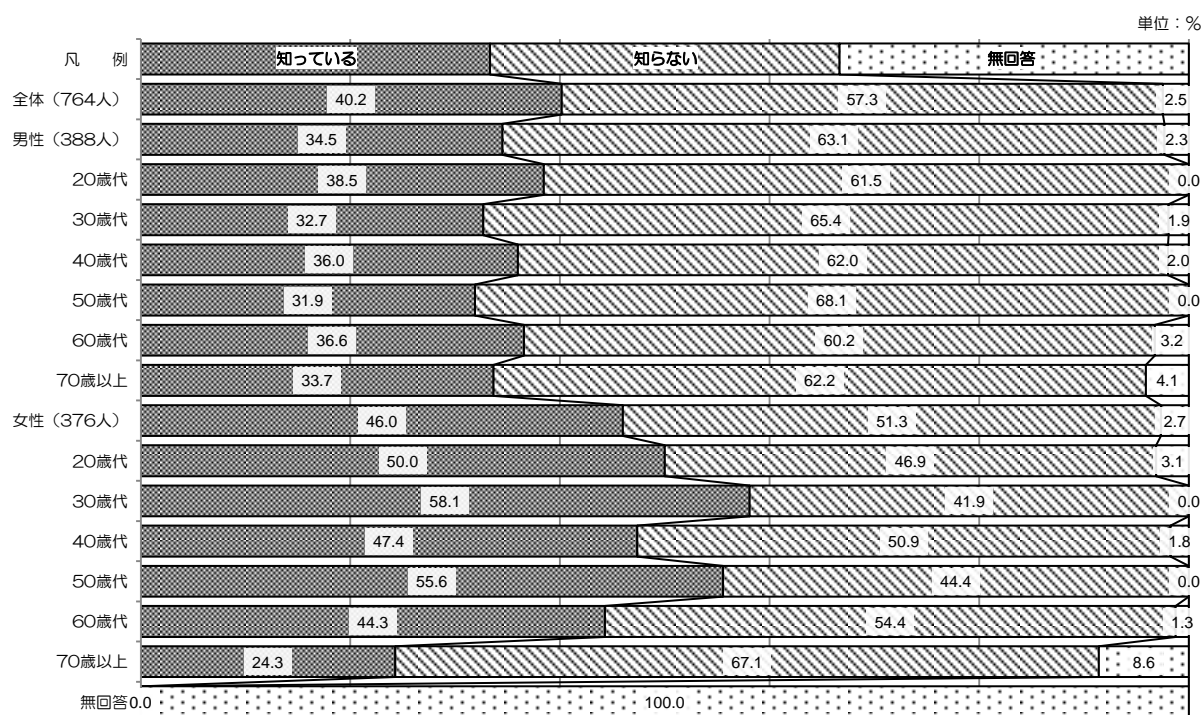
＜全体＞

○全体の4割が市の女性福祉相談室を「知っている」と回答しています。

＜性別・年代別＞

○性別でみると、男性においては34.5%、女性においては46.0%が「知っている」と回答しており、女性の方が認知度が高くなっています。年代別でみると、男性においては年代による差はあまりみられません、女性においては70歳以上を除いて、約半数が認知している状況となっています。

問 15 会津若松市女性福祉相談室の認知度 ＜性別、年代別＞



**会津若松市女性福祉相談室の利用**

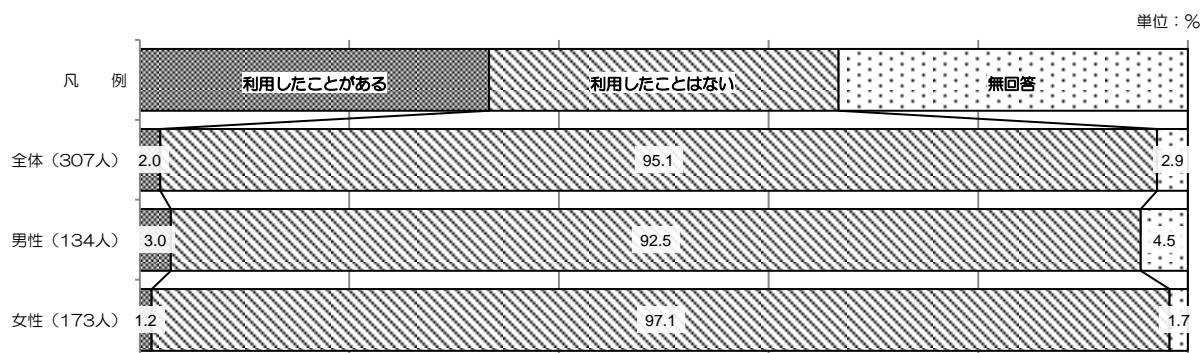
相談室を「知っている」と回答した人のうち、2%の人が「利用したことがある」と回答しています。

問 15-1 女性相談室を利用したことはありますか。あてはまるものを1つ選んで、回答欄に番号をご記入ください。

<全体>

○相談室を「知っている」と回答した人のうち、全体で2%が「利用したことがある」と回答しています。  
 なお、男性も3%が「利用したことがある」と回答しています。

問 15-1 会津若松市女性福祉相談室の利用 <相談室を「知っている」と回答した人における利用の有無の割合>



会津若松市女性福祉相談室の利用希望時間帯

平日の日中以外にも、夜間や土日に相談希望者が多くなっています。

問 15-2 相談しようと思った場合に利用しやすい日時・時間帯はいつですか。あてはまるものをすべて選んで回答欄に番号をご記入ください。

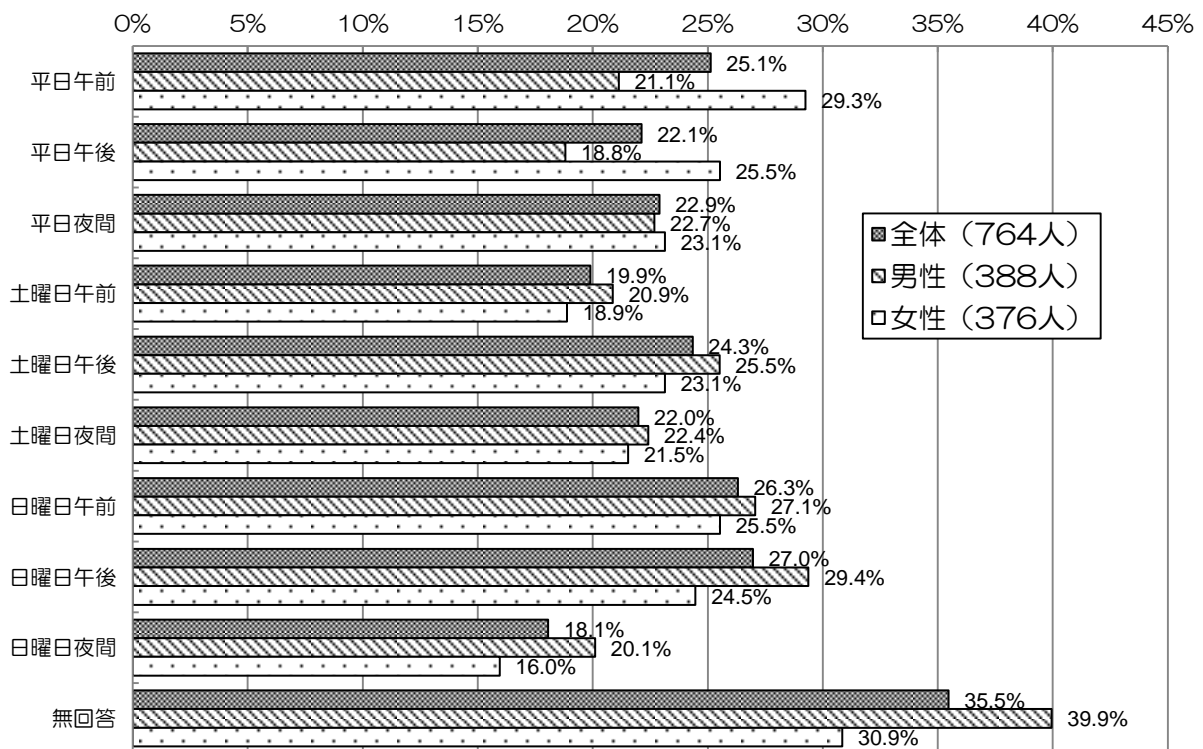
<全体>

○全体では、「日曜日午後」が27.0%と一番多くなっており、次いで順に「日曜日午前（26.3%）」「平日午前（25.1%）」「土曜日午後（24.3%）」などとなっています。

<性別>

○性別で見ると、男性においては「日曜日午後」が29.4%と一番多くなっています。女性においては、「平日午前」が29.3%と一番多くなっています。

問 15-2 会津若松市女性福祉相談室の利用希望時間帯 <性別>



<考察> (問 15、問 15-1 を含)

○調査結果から、全体の4割、女性においては5割弱が「知っている」と回答しており、そのうち2%の人が「利用したことがある」と回答しています。

○相談室の利用希望時間帯としては、平日の日中以外にも夜間・土日が多いことから、相談環境の整備の観点から、さらなる相談窓口の周知とあわせ相談時間の拡大などが考えられます。

#### 6. 「認知度、イメージ、市の施策に望むこと、その他」について

##### 各用語の認知度

多くの用語の認知度が5割を上回っているのに対し、市の「男女共同参画推進条例」や「男女共同参画推進プラン」に対する認知度は低くなっています。いずれの用語においても男性より女性の方が認知度が低くなっています。

問 16 あなたは、次の言葉をご存知ですか。あてはまるものをそれぞれ1つ選んで、回答欄に番号をご記入ください。

##### <全体>

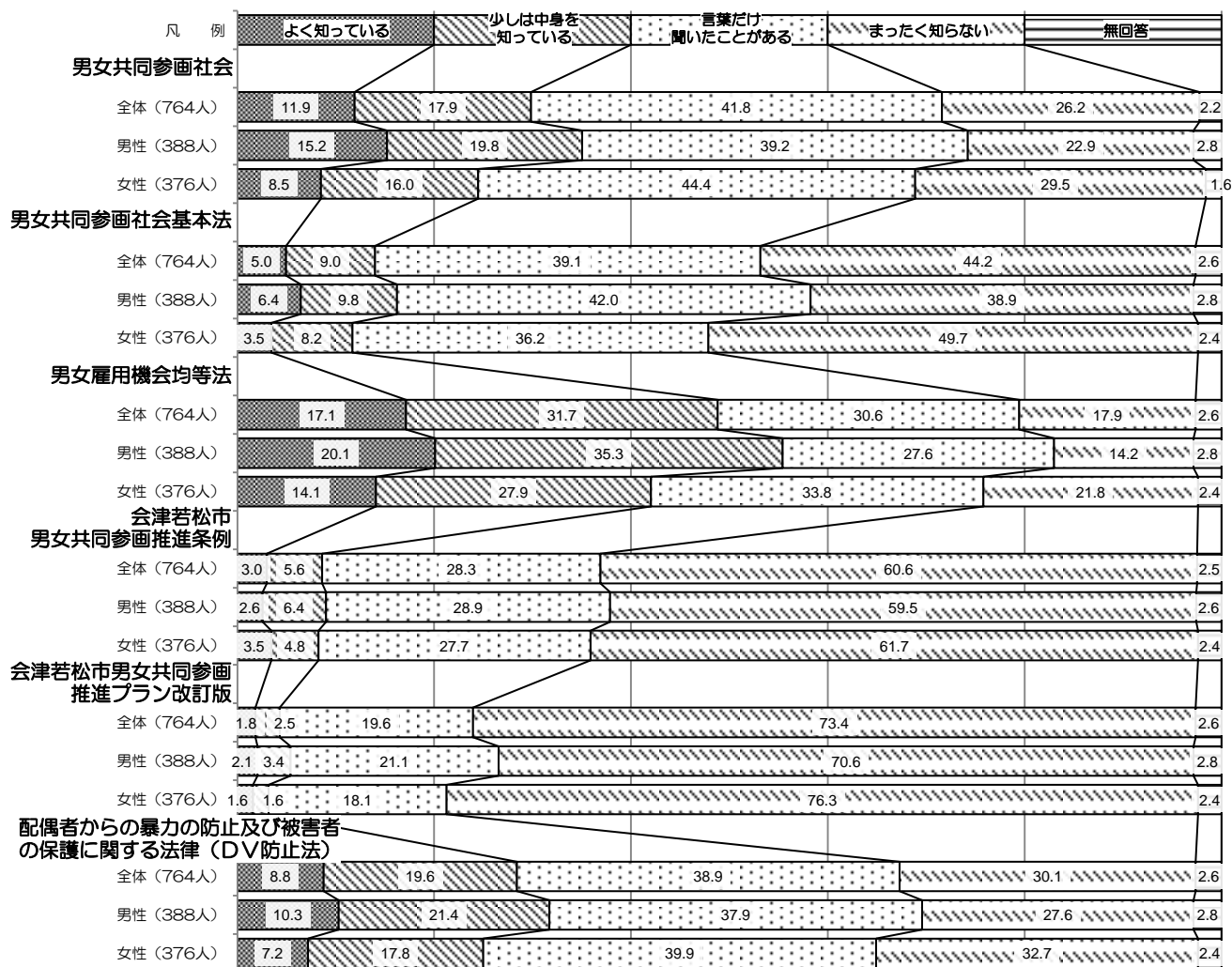
○6つの用語のうち、「男女雇用機会均等法」が79.4%と一番認知度（「よく知っている」と「少しは中身を知っている」と「言葉だけ聞いたことがある」の合計）が高くなっています。次いで順に「男女共同参画社会（71.6%）」「配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護に関する法律（DV防止法）（67.3%）」「男女共同参画社会基本法（53.1%）」となっており、認知度は5割を超えていますが、それらに比べて「会津若松市男女共同参画推進条例（36.9%）」「会津若松市男女共同参画推進プラン改訂版（23.9%）」の認知度は低くなっています。

##### <性別>

○性別で見ると、ほとんどの用語の認知度で男性の方が女性より5ポイント程度高くなっています。特に「男女共同参画社会基本法」においては、女性に比べて男性の方が10ポイント程度高くなっています。

問16 各用語の認知度 <性別>

単位：%



<前回調査との比較>

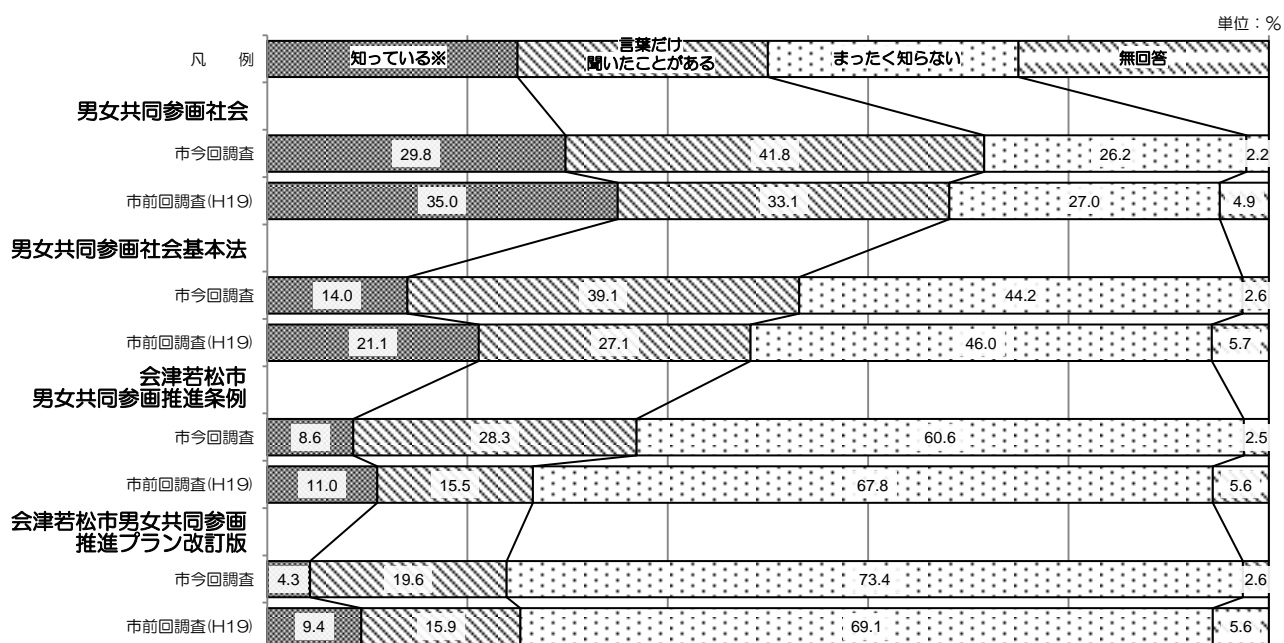
○4つの用語のうち、前回調査と比較して、いずれの用語も「知っている」（「よく知っている」と「少しは中身を知っている」の合計）は微減していますが、「言葉だけ聞いたことがある」まで含めると「会津若松市男女共同参画推進プラン改訂版」以外では認知度が高くなっています。

○用語「男女共同参画社会」において、全国調査での周知度（見たり聞いたりしたことがあるもの割合）と比較すると、今回調査での認知度（「知っている」と「言葉だけ聞いたことがある」の合計）が約8ポイント高くなっています。

### 第3章 調査結果の概要と分析

#### 問16 各用語の認知度 <前回調査との比較>

(数値のみ：全国調査(H24)「男女共同参画社会」周知度 63.7%)



※知っている(「よく知っている」と「少しは中身を知っている」の合計)

平成19年度の調査に合わせ再集計しています。

#### <考察>

〇調査結果から、多くの用語の認知度が5割を上回っているのに対し、「会津若松市男女共同参画推進条例」や「会津若松市男女共同参画推進プラン改訂版」に対する認知度は低くなっており、また、いずれの用語においても男性より女性の認知度が低くなっていることが読み取れます。

〇市としても男女共同参画に関して知る機会を設け、また、啓発活動に根気よく取り組んでいくことが必要であると考えます。

**「男女共同参画」のイメージ（自由記載）**

“男女平等や男女が共に協力すること” などプラスのイメージが6割を占めています。反対に“理想や言葉だけ” “堅苦しい” などのマイナスのイメージや、“そもそもわからない” という回答で3割弱を占めています。

問 17 あなたは「男女共同参画」という言葉に対してどのようなイメージを持たれますか。ご自由にご記入ください。（自由記載）

問 17 「男女共同参画」のイメージ（自由記載） <回答者内訳>

年代	男性	女性	合計
20 歳代	12	11	23
30 歳代	34	20	54
40 歳代	28	19	47
50 歳代	25	25	50
60 歳代	25	39	64
70 歳以上	21	21	42
合計	145	135	280

問 17 「男女共同参画」のイメージ（自由記載） <グルーピング後>

グループ	イメージ	回答数	割合 (%)	グループ割合 (%)
プラスイメージ	男女平等（男女関係なく協力）	153	54.6	60.4
	良いイメージ	12	4.3	
	前向きなイメージ	4	1.4	
マイナスイメージ	理想、言葉だけのイメージ	18	6.4	17.5
	堅そう、堅苦しいイメージ	15	5.4	
	難しい、大変そうなイメージ	5	1.8	
	悪いイメージ	4	1.4	
	反対（良いと思わない）	3	1.1	
	今さら感	2	0.7	
	押しつけ感	1	0.4	
	ナンセンス（無意味）	1	0.4	
わからない	イメージがわからない（わからない、わかりにくい）	14	5.0	7.9
	「参画」がわからない	8	2.9	
その他	女性のイメージ（女性を優遇、強い女）	9	3.2	14.3
	あたりまえ	2	0.7	
	その他（意見など分類ができないもの）	29	10.4	
合計		280	100	100

**男女共同参画社会を実現するために市の施策に望むこと**

子育てや介護など家庭生活や、就労関係など生活の中で現実に直面している課題等の施策の充実を望む回答が多くなっています。

問 18 「男女共同参画社会」を実現するために、会津若松市の施策に望むことは何ですか。次の中からあてはまるものを3つまで選んで、回答欄に番号をご記入ください。

<全体>

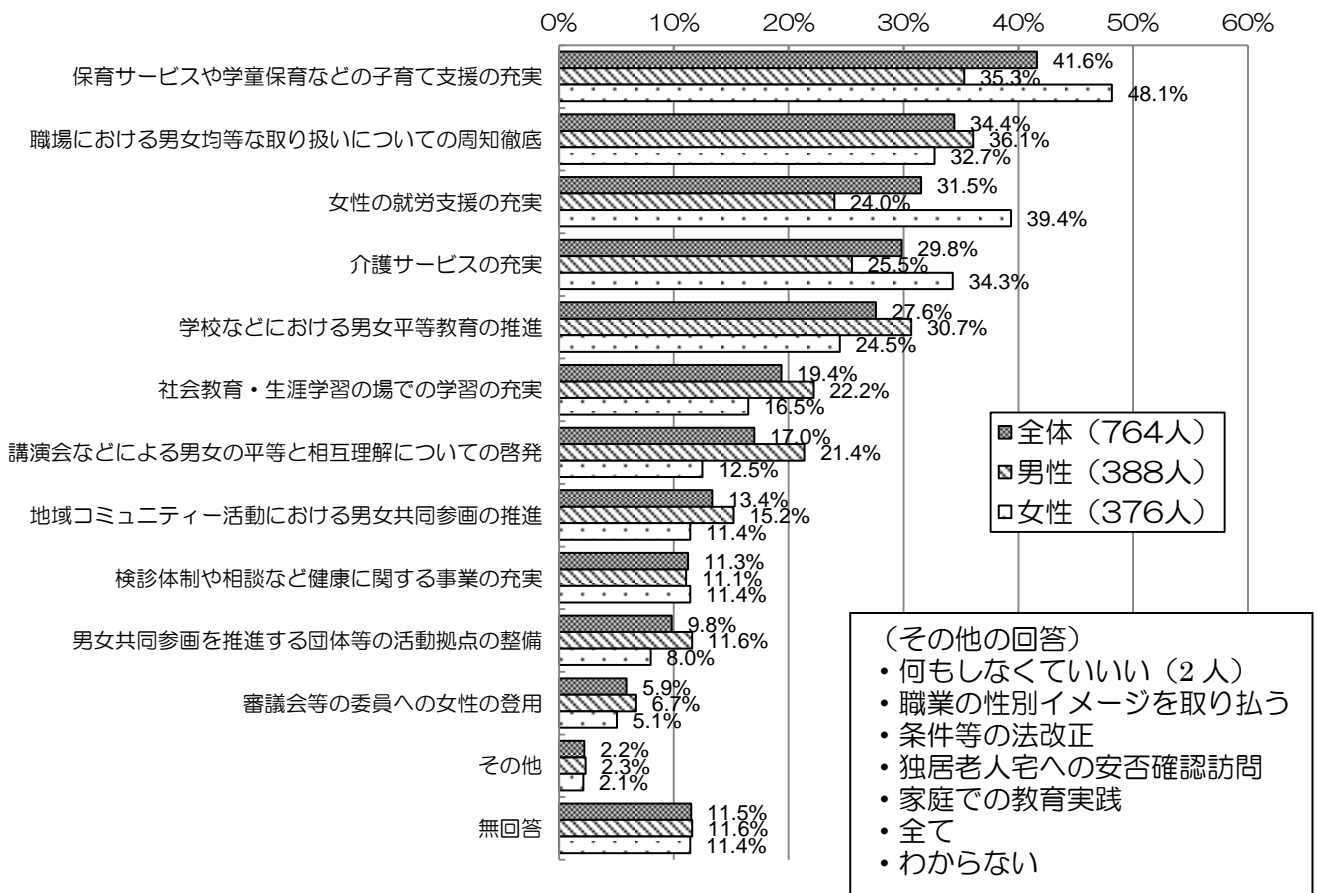
○全体では、「保育サービスや学童保育などの子育て支援の充実」が41.6%と一番多く、次いで順に「職場における男女均等な取り扱いについての周知徹底（34.4%）」「女性の就労支援の充実（31.5%）」「介護サービスの充実（29.8%）」「学校などにおける男女平等教育の推進（27.6%）」などとなっています。

<性別>

○男性においては、「職場における男女均等な取り扱いについての周知徹底」が36.1%と一番多く、次いで順に「保育サービスや学童保育などの子育て支援の充実（35.3%）」「学校などにおける男女平等教育の推進（30.7%）」「介護サービスの充実（25.5%）」などとなっています。

○女性においては、「保育サービスや学童保育などの子育て支援の充実」が48.1%と際立って多くあり、次いで順に「女性の就労支援の充実（39.4%）」「介護サービスの充実（34.3%）」「職場における男女均等な取り扱いについての周知徹底（32.7%）」などとなっています。

問 18 男女共同参画社会を実現するために市の施策に望むこと <性別>





<考察>

○調査結果から、子育てや介護におけるサービスの充実や、女性の就労支援、そして職場における男女均等な取り扱いなど、生活の中で現実にある課題等に対する施策の充実を望む回答が多くなっています。

○特に女性においては、子育てや介護におけるサービスの充実、そして就労支援を望む回答が男性よりも10ポイント以上多くなっていることから、子育てや介護の面で女性にかかる負担が男性よりも大きいこと、また、就労の面で女性自身の希望と現実の差が大きいことなどが表れているものと推察されます。

○「職場における男女均等な取り扱いについての周知徹底」を望む回答が、女性よりも男性で多くなっていることから、職場において男性も差別感を感じていることが推察されます。

**市男女共同参画ホームページの認知度**

全体の2割弱が「見たことがある」と回答しています。

問 19 あなたは、会津若松市のホームページの男女共同参画のページをご覧になったことがありますか。あてはまるものを1つ選んで、回答欄に番号をご記入ください。

<全体>

○全体では、「よく利用している」が0.4%、「見たことがある」が18.3%回答しており、8割弱の人は「見たことがない」と回答しています。

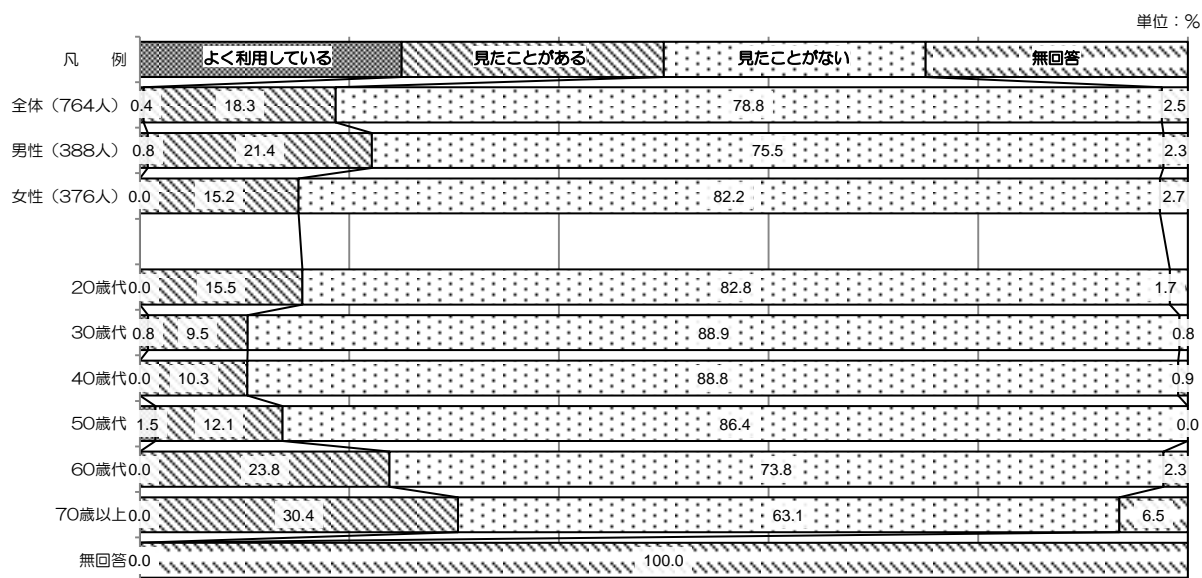
<性別>

○性別で大きな差はみられませんが、女性より男性の方が見たことがある人が多くなっています。

<年代別>

○年代別にみると、60歳以上で「見たことがある」との回答が多くなっています。

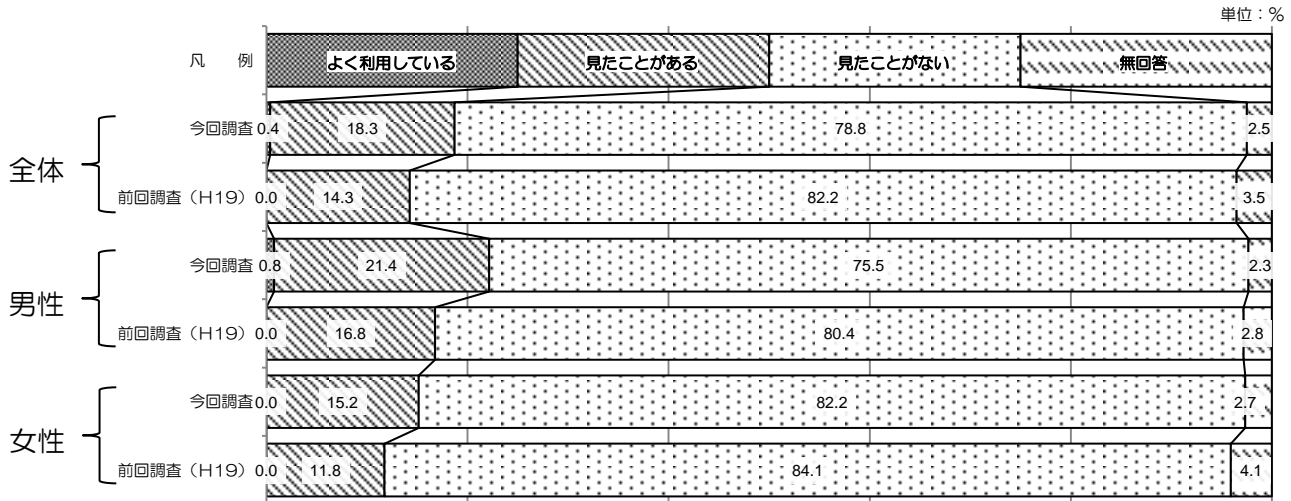
問 19 市男女共同参画ホームページの認知度 <性別・年代別>



<前回調査との比較>

○前回調査と比較すると、全体、男女ともに「見たことがある」が4%増加しており、利用度が若干増えていることがわかります。

問 19 市男女共同参画ホームページの認知度 <前回調査との比較>



<市男女共同参画ホームページを見たことがない理由> (グルーピング結果より)

○「パソコン・インターネット環境がない、できない」が24.3%と一番多く、次いで順に「関心・興味・必要性がない(20.3%)」「知らない、知らなかった(13.1%)」などとなっています。

市男女共同参画ホームページを見たことがない理由<グルーピング結果>

回答理由 (グルーピング後)	回答数	割合 (%)
パソコン・インターネットがない、できない	146	24.3
関心・興味・必要性がない	122	20.3
知らない、知らなかった	79	13.1
暇がない、機会がない	36	6.0
HP以外で見ているから	3	0.5
その他、意見等含む	9	1.5
無回答	207	34.4
合計	602	100

ユニバーサルデザインの認知度

全体の5割強が「知っている」「言葉を聞いたことがある」と回答しています。

問 20 あなたは、ユニバーサルデザインについて知っていますか。あてはまるものを1つ選んで、回答欄に番号をご記入ください。

<全体>

○全体では、「考え方や意味を含めよく知っている」が6.7%、「考え方や意味を少し知っている」が19.0%、「考え方や意味は知らないが、言葉を聞いたことがある」が25.5%となっています。

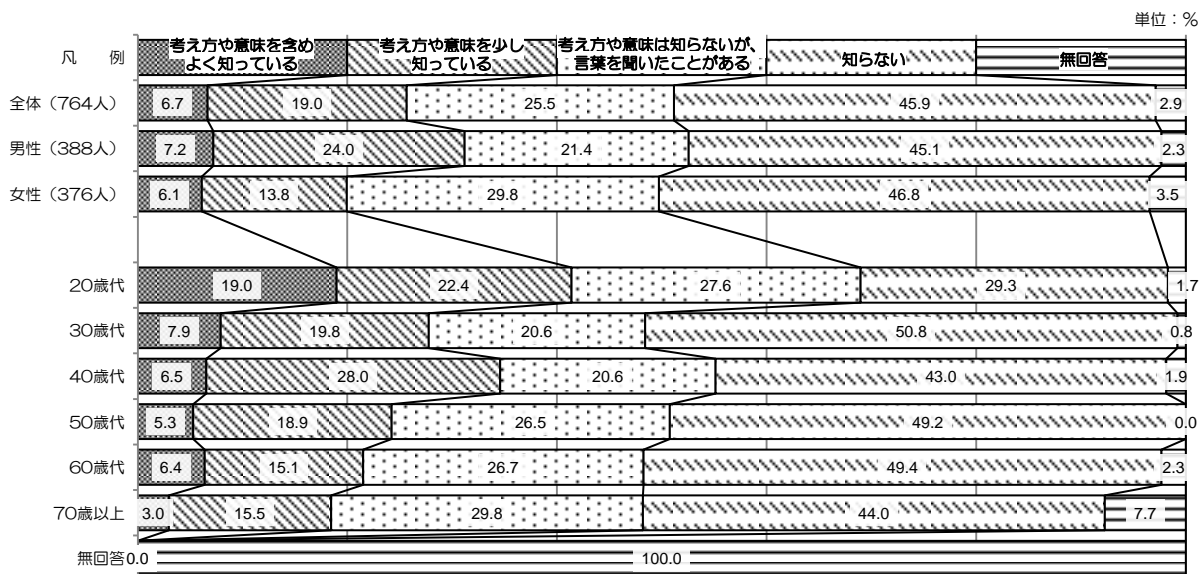
<性別>

○性別で見ると、「考え方や意味は知らないが、言葉を聞いたことがある」までは男女で差は見られませんが、「考え方や意味を少し知っている」までで比較すると、11ポイント程度男性の方が多くなっています。

<年代>

○年代別にみると、20歳代で知っている（「考え方や意味を含めよく知っている」と「考え方や意味を少し知っている」の合計）との回答が多くなっています。

問 20 ユニバーサルデザインの認知度 <性別・年代別>



＜前回調査との比較＞

○前回調査と比較して、「考え方や意味を含めよく知っている」から「考え方や意味は知らないが、言葉を聞いたことはある」までで比べるとほとんど変化はみられませんが、知っている（「考え方や意味を含め知っている」と「考え方や意味を少し知っている」の合計）と回答している人の割合が増加しており、特に男性において7ポイント程度増加しています。

問 20 ユニバーサルデザインの認知度 ＜前回調査との比較＞

